山椒の雑誌

麻生路郎★主宰

昭和十七年二月一日發行第十六卷第二號（毎月一回一日發行）

二月號

Pensoj flugas trans la land-limon

ニキビ

是	吹	ニ
非	出	キ
此	物	ビ
藥	に	・

にきびとり

美顔水

蚤・蚊・南京虫等の毒虫で困ユカいる時！

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

★ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の薬です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！ ゼヒお勸したい薬です！

東京・大阪

桃谷順天館

不朽洞にて（雜感）

麻生路郎

矮小の辯

日本人は米英人にくらべると、體軀矮小で、見た眼は頗る貧弱である。昨年亡くなられた福良竹亭氏の如きは日本人の中でも殊に矮小の方だつたので竹亭氏がロンドンを濶歩（?）してゐられる姿は日本の國辱だとさへ云はれたものだ。ところが、こんどの大東亞戰爭で日本人の精神力が如何に旺盛であるかといふことと肝ッ魂がいかに太いかといふことが實證された譯だ。體軀矮小に至つては全く問題ではない。

大體支那人は戰爭をするのに先づ數を問題とする。英米人は機械力を云々するが、日本人は數量や機械力を無視こそしないが、數を超越し、科學を超越した精神力で押して行くところに彼等の及び難いところがある。

ハワイの大戰果にしても、英の東洋艦隊の撃滅にしても、機械力に頼り過ぎた彼等の錯誤でしかない。

戰地へワイフを携帶したり、ダンサーを伴つたりするやうな外人氣質で眞に日本人を理解し得る筈がない。

布哇の川柳人

ホノルルには我が社の支部がある。そしてハワイの各地には多數の讀者がゐる。

資金凍結後といへども我が社ではそれ等の人たちに本誌の送達を怠らなかつた。しかし八月號を入手して歡喜した報に接して以來、果して雜誌を入手してゐるかどうか疑はしい。

たかは彼等の通信によつて想像するに難くなかつた。

龍田丸に積み込んだ當方最後の通信は、何れも通達不能によつて舞ひ戻つて來た。そして完全に通信が杜絶してしまつた。

布哇の川柳人は、今どうしてゐるだらう。彼等の身邊を想ふ時、私のこころは暗くならざるを得ない。

邦人引揚げに際しても誰一人歸つては來なかつた。萬一の場合があつても私達は踏み留まりますといふ悲壯な最後的な通信が文字通りする實現してゐるのだ。

ハワイの川柳人にとつて本誌を手にすることが如何に大きな欣びであつ

私は又しても彼等の身邊を想はざるを得ない。

川柳雜誌　二月號目次

表紙…（寒碧古）……福井哲
不朽洞にて（雜感）……麻生路郎…（一）
隨想・丹波の猿公猪公其他……小山文三…（一八）
川柳解題と例句……麻生路郎…（一〇）
川柳寫眞（撲滅飛行機）カメラ福井哲・句―諸家（三）
南洋語……須崎豆秋…（一三）
武玉川四篇研究（二七）……梅本嘿山　森東魚　蛭子省二…（四）
病間二句（詩）……高翁…（一七）
初等川柳講座（一）……麻生路郎…（一一）
陶書一千雜錄……前田五健…（一三）
川柳世界史（一一）……戸田孤蓬…（一〇）
愚談……小畑自有浪…（一三）
川柳にうまを拾ふ……鈴木石鹿…（一〇）
月評作家指針……路郎・丹路・馥乃…（一四）
修養奇談・音感教育……篠山籌彦…（一六）
句集「大空」の序……麻生路郎…（一九）
犯人……後藤田凡生…（一九）
川柳漫畫漫筆は動く……小畑自有浪…（一二）
豆ニュース……（一九）

★

近作柳樹……麻生路郎選…（一四）
川柳塔……麻生路郎選…（一六）
同舟近詠……諸家…（一九）
一路雪空……岡田某人選…（二〇）
集軍事便……高峰柳兒選…（二八）
各地柳壇……（二三）
川協・柳界展望……（二八）　七號室雜記……（二五）
社關係の人々……（二六）
川柳書架（八〇）……（二九）　飛燕往來……（二九）

川柳をつくりたいがどうしたらいゝか

初等川柳講座（一）

麻生路郎

川柳を創つて見たいが、どうしたらいゝのです？この平凡な質問が、いつも私を苦しめます。では斯うなさいと道を教へるやうに一ト口で申上げにくいからです。

假りに三味線を教はるにしても、こゝを斯うおさえて、こゝを斯う鳴らすのですと云はれても、その通りにおさえることも、その通りに鳴らすことも出來ないものです。

かりにその通りにおさえ、その通りに鳴らしたやうであつても、師匠と同じ音色が決して出るものではありません。まして、調子のことから強弱のこと、何から何まで聽かして貰つたところで、なるほどそんなものかと思ふだけで、てんでその眞似も出來なければ、頭に殘るものでもありません。なぜ同じところをおさえ、同じところを彈ひてゐるのに、師匠の通りの音色が出ないかと申しますと三味線の構え方や撥の持ち方がなか〳〵師匠と同じやうには出來ない。從つて同じとこをおさえ、おなじとこを彈ひたと思つてゐても、撥が絃に觸れる瞬間にもう多少の狂ひが出來るので、同じ音色が出ないのです。三味線は再演藝術でありますから、師匠から習つた曲をそのまゝ表現出來さへすれば、それでいゝとしなければならないのですが、それすら相當に彈けるやうになるまでには練習上かなりの苦心を要するのであります。

なるほど三味線の難しいことは判るが、川柳なら、眞似ぐらゐは直ぐに出來るとお考へになるかも知れませんが、川柳でも難しく申せば矢張り一寸話を聽かれたり、少しく讀まれた位で、直ぐ眞似が出來るやうに考へたら間違ひだと思ひます。殊に川柳は創作藝術であつて、いかにいゝ句が創れたとしても、既に先人が、その句を創つてゐる場合には、先人にその功を讓つて自分の創つた句として發表することは出來ないのであります。つまり誰もまだ創つたことのない句を創らなければならないのであります。そこに樂しみもあり又難しさもあるのであります。しかし難しいといふのは、うまい句をつくるのが難しいのであつて、どうせ最初からうまい句はつくれないと知つたら、ボツ〳〵研究するより外に方法はないのであります。

一歩一歩根氣よく研究をすゝめて行けば、人並みの句が創れるやうになるのには、必ずしもそう難しいものだとも云へないのです。

そこで、川柳をつくつて見たいが、怎うしたらいゝかといふ人たちの多少とも參考になりそうなことを極く平易に書いて見ませう。

川柳をつくるといふても、ただ漫然と考へてゐたところで出て來るものではありません。極く最初は創るより先づ先人のつくつた句を澤山讀むことです。澤山讀むと、その中で、特に自分の心をその方へひきつける句があるものです。そして川柳の面白味が判つて來るやうな氣がするものです。すると何か創つて見たいやうな氣がきざしてまゐります。

そこでどんな句をどんな風に創つたらいゝかといふことになりますが、句の對象は、森羅萬象何んでもいゝのですから、最初は極く大膽につくることです。

こどもの手習を見てゐると全體の見當がつかないで紙の外へ線を引つぱつたりするものですが、あの調子で、感興の湧くまゝに、自由に放膽に創るのが、はやく上達するやうであります。そしてボチボチ句が出來たら、それを先輩に見て貰つて、その巧拙の批判をうけるのです。たいていの先輩は、その句の缺點をハツキリと指摘して呉れますから、それを參考に、ドシ〳〵多作することです。この多作といふことが初心の人たちにとつては尤も必要です。頭の中でモヤ〳〵してゐるものを何んでも彼でも句にすることは一種のあぶら抜きであります。そして多作と多讀とを繰り返へし繰り返へしすることが、多ければ多いほど作句が樂になり、そのうちに先輩にも褒められるやうな句がちよい〳〵出來て來るものです。こゝまで來たら、句の素

材や用語について、その表現の仕方について、又作句するのに、感興を喚起させる方法について、作句の態度についてといふやうに、いろ〳〵と微細な研究をはじめなければならないのです。

しかし斯うした研究をするのに適當な參考書を手に入れることは至難でありますから大てい先輩の指導に俟つのでありますが、その先輩が必ずしも、指導的技能のすぐれた人ばかりではありませんし、又その先輩の作句態度が眞劍であるか、遊戯的であるかといふことも知つて、指導をうけないと、全く邪道に這入らないとも限らないのであります。

ところが、そうした先輩の指導をうけることの出來ない人たちは怎うしたらいゝかと申しますと、「川柳雜誌」の投句欄へ投句して、選者によつて自分の作品の篩落しをして貰ひ、入選句と沒の句によつて、自分の句の行く途を知るのです。同時に參考となる記事を耽讀して、自分の作品の巧拙を批判檢討いたします。或は通信によつて疑點の氷解をはかるのも一方法ですが、これは人を得なければ滿足な解答は得られません。滿足な解答の出來るやうな人は多忙なので、一個人の質疑に應答してゐる時間が無いのであります。そうした惱みを持つてゐられる方は不朽洞會のやうな研究團體に加入されゝば研究上の便宜が與へられます。不朽洞會は私の指導の下に集つてゐる作家達でありますが、會員の中には既に一家をなしてゐる人たちもありますので、初心の方が句を見て貰ふのには事缺かぬ現狀であります。

投句だけでは隔靴搔痒の感がする人たちは句會に出席するのも一つの方法です。句會は一つの作句道場です。作句の練習をするのには句會が一番いゝやうです。はじめは一寸行きにくいものですが、勇を鼓して出かけて見ると、案外面白いものです。それに最初顏なじみのない時には氣まづい感もいたしますが、大たい同好の士が集まつてゐるのですぐ心やすくなり、次の句會が待たれるやうになるものです。

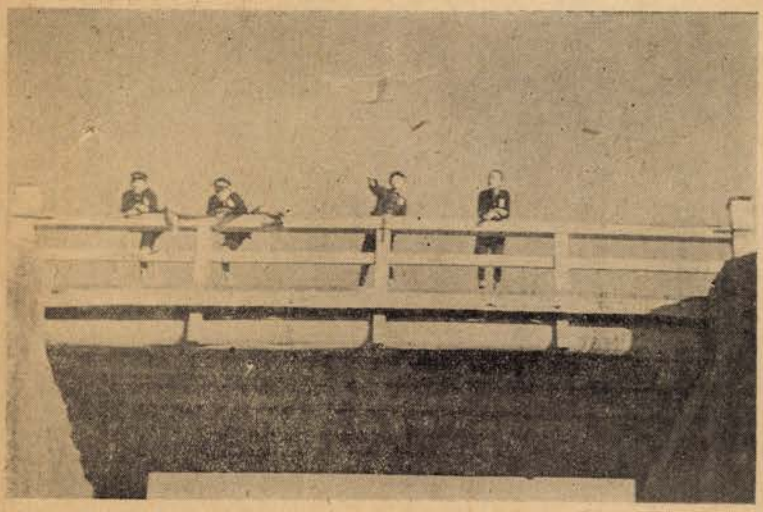
句會へ出て一句も拔けなくとも、失望せずに、續いて出かければ、必ず拔けるやうになるものです。たとへ沒になつても、何故沒になつたかを質問したければ句會には多くの先輩が集つてゐるのですから、その便宜は充分得られます。しかし、句會では多數の人々の競吟ですから、どうも質問がしにくいと思ふ方で、大阪附近の方は松坂屋百貨店の七階に開講されてゐる松坂倶樂部川柳講座へ入會されるのも方法でせう。

この講座は現在公開されてゐる日本唯一の川柳道場です。地方の方で、これ等の便宜を得られない方は川柳雜誌社の支部の句會へ出られるのもいゝし、又その方面で二三の同好をあつめ、相互に啓蒙し合ふのもよいと思ひます。少し數が出來れば雜誌社と連絡をとつて支部をつくれば句の發表の上にも惠ぐまれて作句熱が一段と上昇するでせう

前に多讀のことを申上げましたが、この場合の多讀は現代作品の多讀でありまして、古川柳の多讀を意味してゐません。何故かと云ひますと、古川柳を多讀いたしますと、古川柳の調子に知らず識らず引きずり込まれるからであります。それに古川柳はその時代の風俗習慣人情などが判らぬと意味がサツパリ通じない句もあるといふ難點もあるので初心の方は先づ新らしい句即ち現代句の多讀をする方が得策であります。

川柳を作るのに川柳だけ讀んでゐればいゝ譯でないことは云ふまでもありません。

では、どんなものを讀めばいゝかと云ふことは別講で詳說することゝいたします。



お使ひが遲れてしもた模擬飛行　無名

こんな川ぐらひ模型機飛び越える　美知夫

自爆する覺悟愛機は手を離れ　黎光

グライダー今度は僕が飛ばす番　子紋

模型機が飛ぶ春の空春の川　九一

怒られもせず模型機がつき當り　波夢造

模型機も自爆と云つた型で降り　不二

カメラ　福井哲

武玉川四編研究（二七）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

（622）

とこそて中を遠ふ假親

省二＝實の親とでさへ中違ひをする事はある。況んや假親に於てをや。假親だから利害事情などで衝突する折りも多いとは云ひ得る。世の常だ。

東魚＝嫁に行く時の假親と、いつかは中を違ふ事が、出來上がると云ふのではあるまいか。

塵山＝昔の假親には、嫁に行く時のと、武家に奉公をする時のとがあり、單に名ばかりである故、偶に衝突する事もあらう。

省二＝身賣りする時にも、名儀を借りる。假親といふ。結局他人なのだから、中違ひも生じ易い。

（623）

めうかの鶴のくさる舟底

東魚＝料理のつまの茗荷を、舞鶴の趣きに作つたのが、（茗荷をへがして、左右へ翼のやうに擴げるのだと思ふ）遊山船の底に殘つてゐたと云ふので、前の日の賑やかな趣きに對して、佗しさが描き出されてゐる。（京傳の戯作模樣に茗荷鶴と云ふのが、確かあつたと思ふ）。

塵山＝硯蓋に盛る口取肴に添える茗荷で造つた鶴で、これを「むきもの」と稱へたが、今日では廢れて用ひられぬ。

省二＝「むきもの」或は「つくりもの」などと云ふ。一寸京傳の「小紋雅話」をみたが見當らなかつた。

（624）

看病か死ぬ氣に成と床を上

東魚＝一に看病と云ふ位であるので、看病人が死に身になつての介抱に、病人は癒て全快の床上げをするとであらう。

塵山＝現代ならば赤十字の看護婦さん達。

省二＝看護人の側から詠んだところ面白し。

（625）

美男一代すまふ一代

省二＝美男は役者を指してゐるのか。相撲は古川柳では「いゝ男」と許り云つて居る。

東魚＝力士の美男なのではないか。男一代晴れには美男である。然かも天下の力士であると云ふ氣持ち。

塵山＝美男としても一代、相撲としても一代と云ふので、前說の如くであらう。

（626）

請狀よめハ母ハふるへる

省二＝母親の慈愛の發露。急に心淋しくなり神經も昂り震へる。他人に預けてしまふのだから。

東魚＝覺悟をしてゐたものゝ、あゝこれで暫くは他人の飯に苦勞する事だらうと思ひやるも、流石に母親である。

塵山＝娘の身賣りで、忠臣藏の六段目のやうな場合と思はれる。

（627）

波悠々と舟に年玉

東魚＝目出度い初春の入船であらう。

塵山＝新川の初荷舟か。

省二＝繪になる句。

（628）

嫁の湯漬の細長い音

東魚＝大きな口をあかず、細々と湯漬をすゝる、內氣な趣きである。

塵山＝箸も又銀製の細いのであらう。

省二＝古川柳には「細長く嫁の湯漬の音がする」。

（629）

杜若蛙は聲のうらを出し

省二＝古川柳には「聲を呂におとし」とある。等し。

東魚＝蛙の聲の低いのに、雨の音など聞えるやうな連想が起る。

塵山＝春の蛙は聲が優しいけれど其の蛙は聲が嚴しいのみで懷し氣がない。

（630）

朝貝にまた六月の日か殘り

省二＝俳諧では朝顏は七月の季だ。六月の日が殘つて、咲く日が待たれる。

東魚＝はや咲き初めた朝顏に、まだ暑い六月の日がさすと云ふので、直ぐしぼむいたいけな花の姿が思はれる。

塵山＝未だ咲かぬ花か。既に咲いた花か、不明のやうであるが、私は咲かぬと云ふ說に左袒する。

（631）

千ス大根菰に莚に小夜衣

東魚＝菰や莚で霜をよける心持ちを、小夜衣と云つたのではないか。

塵山＝此の小夜衣も、つまを重ねるであらう。

省二＝然らむ。

（632）

横から膳をすへる帳書

東魚＝新年に使用し初める帳の上ハ書に、達筆を振ふところであらう

先づ一杯あがり乍らと脇へ膳をすゑると云ふので、前には帳を膝元にひきつけて筆を採る樣が想像される。

麈山＝此の「帳書」は帳附けといふ意で、その表紙に筆を揮ふのではないと私は考へる。

省二＝私も帳附けをして居る場合と解してゐた。邪魔にならぬやうに横へ膳を据える。

（633）

氣の勝て居金借の供

省二＝「金借の供」は金貸の供の事。濟す時のエンマ顏といふ程だから、金貸の供たる者、氣が勝つて強くなくては務になるまい。

東魚＝間貫一ぢやないが闇打ちなども喰はぬともかぎらぬ。金貸の供は氣丈のものでなければ出來まい。

麈山＝高利坐頭の從者でがなあらう。

（634）

胡葱を酢味噌の中へ植て行

省二＝三月節句の淺葱膾。アサツキやアサリを酢味噌にてあへる。下五は妙な表現ではある。

東魚＝「植て行」といふのは、どういふ趣きであらうか。胡葱を酢味噌の鉢へ植えたやうに喰べのこし、つきさしたのであらうか。

麈山＝淺葱膾に相違ないが、坐五は下婢が主家より暇を取つて、出て行くといふ意を利かせたらしいが、「植て行」は少し變に聞ゆる。

（635）

まじめに成て普門品よむ

省二＝息子が心を改めて、普門品をよむようになる。「美しさ普門品第二十軒」の如く、淺草寺にかけたもの北國道樂の息子さんであらう。

東魚＝急に雷が鳴つたりした場合に、遊山船などで騷いでゐたのが、まじめな顏になつて、普門品を唱したと云ふ場合かと思ふ。句面から前說の如き時間の長さが、どうも感じられない。

麈山＝東魚說に贊成する。雷鳴に恐怖して、眞面目に誦經するのである。

（636）

年たくな眞赤に成て逃て行

東魚＝「年たくな」は嘗て解があつたかに思ふが、只今調べるよすがもない。年のいつてゐるわりには、おぼこいと云ふ心持ちに考へられる。

麈山＝未だ年が若いのではない歟。

省二＝年嵩の方かと思つてゐた。だから眞赤に成るのであらう。

（637）

寢兼た茄子墾見に行

東魚＝献上の初茄子でもあるか。解し得ない。

麈山＝畠の茄子らしいが、上五の「寢兼た」が何とも解し難い。

省二＝上五が判らぬ。

（638）

寸三切のねしる手元ハ安大事

省二＝壁をぬる時の寸法を切る。少し捻ぢりつつ押してゆき小さくきる。手加減ものである。

東魚＝苅をきる時、左手は束につかんで押し當て氣味にする樣子を捻ぢると詠んだのであらう。安大事は申す迄もなく見かけによらず六ケ敷いとの心持ち。

麈山＝此業にも手練を要して、素人には出來ぬとであらう。

武玉川四篇研究（二六號）正誤表

（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
二	一	一	つむ	つまむ
二	一	十	心覺に	心覺ハ
三	四	十四	聲は	聲ハ（原本）

戰線の將士へ
白衣の勇士へ
慰問品を
慰問袋
慰問品賣場　一階
實用向百貨店
松坂屋
大阪・日本橋

川柳塔

=路郎選=

鶏へ蹋めばこれもわが家族　兵庫縣　奥村丹路

靜脈の走る乳房を子に與へ

私の日曜日

笑ひつゝ晴耕雨讀と答へとき

遙かなる柳路氏に

職域にゐつき誘ひの手に乘れず

一列のなかの一人にお辭儀され　芦屋　寺井鋭々

十二月八日以來眞珠灣淺し

演習かなどゝ米兵まだ寢ぼけ

朝の髭剃らず米兵爆死せり

爐邊叫喚の放送は流石なし

溝もお正月きれいな水流れ

對米英開戰（二句）

鯨より樂に米艦捕獲され

マレー沖まで英艦は沈みに來

夫人自ら嫁入るがほど買漁り

末つ子も假名の日記をつけはじめ　大阪府高石町　戸田孤篷

霰やコンコン北海警備の人がある

マニラ陷つ

身代りの緋緞もなく西へ落ち

新國劇「東郷元帥」を觀る

敵艦見ゆこれが劇だと思へるか

署名などどうでも東亞の大壁畫　大阪　中島生々庵

暮し向き列ぶ餘裕もないと云ふ

花婿の買ひ溜めらしい靴が鳴り

この朝の挨拶日本の强さかな

Z旗にもう神風のはためきて　兵庫縣川西町　戸倉普天

宣戰布告

宣戰だ鬚でもそろうよお湯を呉れ

大戰果

ハワイでは當て身、マレーで面を採り

氣の弱い女中ぢや菓子も買へぬらし　大阪府高石町　米本貴志子

大東亞戰爭下に新年を迎ふ

初日の出七つの海にまぶし過ぎ

お煮〆の味を知らない國は負け

勝つて居るニュースが日記初めなり

元旦のコタツに世界地圖があり

嫁がせてお灸のあとが薄れゆき　兵庫縣　水谷鮎美

開戰の話に風呂のいゝかげん

七年振りに亡父の夢をみる

ふだん着の亡父の入齒の音がしてゐる　大阪　橋本綠雨

職域を忘れて話す世界地圖

賽錢を見てる男のあさましさ

春日神社參拜（一月二日）

粉雪に鹿首を振り首を振り

十二月八日献金列をなし

買初めの半分入れる慰問袋

電髪は敗戰國の眞似と知り

★

流行歌が上手く女工がやめられず　尼崎　飯尾寄與史

休閑地まではゆかない箱に蒔き

病氣しにさも美しく生れて來

マニキユーアその手で御飯たけますか　西宮　谷口綠葉

本店をマレーへなどゝ會社員

戰勝に醉つてはゐないがこの氣持

嫁きおくれ未だ同窓會の幹事です　德島縣穴吹町　姫田夕鐘

十二月八日

日、米、戰はじ――つひに過去のものとなり

ホノルル初空襲

同胞の生命線を云ふとれず

香港陷落

百年と云ふきつかけにけりがつき

元旦の眞珠灣爆撃寫眞（二句）

國寶的寫眞へ雜煮の箸を置き

慌てしやんすな海鷲の小手調べ　奉天　吉田水車

電撃へチヤーチル眼鏡かけ直し

勅題謹詠

連峰の雲の明るし一と所

チヤーチル潛水艦にて歸國（二句）

海の底匂はな歸れぬとは哀れ

チヤーチルも遂に平家の蟹となり　大阪　須崎豆秋

新聞共販

配達はもう走つたりなぞしない

デパートでボンボン言はれることに馴れ

股くら火して門衛が睨らんでる　松本　石曾根民郎

昭和十六年十二月八日畏くも對米英宣戰の大詔發布さる（三句）

みことのりかしこむ民にわれもひとり

みことののりこのくにに生きむはるけくも

みことのり誓ひ合ふ瞳は應へたる

昭和十六年十二月八日ハワイ攻撃

眞珠灣天兵何をたくみなる

わが郷土の生める「空の飯沼」マレーに散華す

神風の飯沼の死も決戰下　大阪　正本水客

敵前上陸、自信滿々たる日の出

十日戎避難演習ともみえて

自己紹介突飛な聲を覺えられ

丸髷で出て押賣に負けてゐず

肩をもむ父に丸髷匂ふなり　豐中　黑川紫香

いゝ貸間主人（あるじ）植木に趣味があり

停年の其の日職場の塵をとり

其の門出家へ敬禮して出かけ　大阪　丸尾潮花

奉戴日女給も朝の砂を踏む

京極で三人ながら喰ひはぐれ

希望まだ捨てず都の隅にゐる

驛の灯の下で略圖を開いて見

まだ逢へることを信じて嫁かず居る　神戸　岡田某人

繪のうまい子で健康を氣遣はれ

渡しからひよいと飛んだは村の人

裏の方で聲あり村の荒物屋
集印帳風へ向つて歩くなり

尼崎　酒井斗風

正月の準備英靈還つて來
冬の陽を背に鄉土史を讀みふけり
子が出來るまでと働く女工さん
陽の椽に子のはと笛を父がふく

大詔渙發

病床に膝を正してきくラジオ
三寒四温古老に日露戰を聞く
六十の手傳ひ偉人傳を讀む
古本屋上眼を使ふ客が來る
夜遊びのせめて國旗を入れるなり
療養所生活妻へ殿とかき
富士山の雪がニュースになる日本
當然のやうにどの子も親に似る

大阪　北川春巢

大阪　西尾栞

父死去

マニラ陷落きいて享年六十九
十八人の孫に寢棺は取りまかれ
命日は一月四日集ひよし
支那語二つ三つ日露の勇士なり

廣島　濱田久米雄

一身を願る日は過去のこと
神風の下で荒鷲氣が揃ひ
胸に問ひ應へて大詔奉戴日
元旦の合唱海を越えよかし

大阪　魚住滿潮

マニラ陷つ、しひたげられた民の唄
千載一遇二度目の禊して出かけ
かゝる秋しろい御飯の戴ける
戰果擴大何にも要らぬなと思ひ
一枚の蒲團それも思へば勿體なし

大阪　中內翠芳

今一度讀みなほしてる慰問文
人知れぬ苦惱を水に語つてる

下關　多田市多樓

戰捷の春の徒食を叱られる
嬉しさは雜煮へ男の子がならび
捷報へ炭つぐ妻も手を休め

大阪　夷一笑

おひろめはかづちの重さ知る日なり
ひかされたことがわかつてあきらめる
春の泥牛のわらじがぬいであり
英米の今さらなすり合ふたとて
ざまあ見やがれ英米の共だほれ

大津　鈴木石鹿

休閑地冬の間は忘れられ
組合の事務所へ貸して轉業し
婦人常會泣きやまないぞと呼びに來る
有難い統制ですと炭をつぎ

大牟田　高田抱逸

奥の手は未だ〳〵見せぬ日本軍
訓誡はせずにとつ辯よく叱り
聖戰下牛いそぐこと急ぐこと

姪尾上神社に華燭の典をあぐ（三句）

美しき一羽の小鳥塒出づ
玉串を捧ぐ花嫁ちと後れ
ヒコーキの爆音のりとを少し消し

尼崎　小林文月

★「句集」

『大空』の序

麻生路郎

序文らしい序文は床に出嘗目な軸をかけてあるやうなもので、本としての體裁は整ふかも知れないが實がないやうな氣がする。民郎君が、私に序文を書けといふのも、私が徒らに美辭麗句を並べないことを知つての上だと思ふ。

民郎君の川柳生活は昭和五年にはじまつてゐる。はじめてその處女作を私の主宰をしてゐる「川柳雜誌」に投じて來たころは「らつぱ」と號してゐたが、幾ばくもなく本名の民郎をそのまゝ號として、眞摯な態度で作句に臨んだ。その後、川柳雜誌社同人の列に入つて、鄕土色豐かな異色ある作家として全國に知られ、川柳雜誌社の改組後、不朽洞會員の一員として「川柳雜誌」で重きをなしてゐる。

君は單に作家として異色あるばかりでなく、古句に好尙をもち、民俗方面に於ても一見識を有してゐる。又藏書票に關しても造詣が深いと聞く。特にこの方面の機關誌として「川柳しなの」を刊行してゐたが時局に鑑み昭和十五年十月限り廢刊してしまつた。

民郎君は痩身長軀である。その性格は外部から見るほど單純ではない。溫順ではあるが盲從はしない。聰明ではあるが冷徹ではない。寡默ではあるが時に敢然として語る。

君は家業に專念する外ほ孝養と讀書に時間を消すことをもつて人生至上の幸福としてゐる。

君は無口の人に珍らしい世話好きで、常に同志のために勞を惜しまないし、新體制下の地方文化人として奔命しつゝある。一貫しての親切は彼を今日あらしめた所以である。

別府の木村晃卓君の闘病生活句集とも云ふべき「僕を語る」を、死ぬ以前に上梓したその友情を私は決して忘れることが出來ない。印刷は家業ではないかと云ふ人があるかも知れない。然り、家業であるからこそむしろ至難な立場にあつたのを敢然として惜しみなく友情を傾けつくした民郎君を忘れ得ないのである。

君の句は至つて地味である。地味ではあるが暗さはない、信州の土からにじみ出た生地なりの句である。今よりも若かつたころの句を見ても決して絢爛な句を吐いてゐない。

そうした句風の持主が昭和五年一月から十有餘年間、一句一句と吐きすてゝ來た川柳の集纒を一帖として茲に公にしたいと云ふのが川柳句集「大空」の世に出る動機となつたのである。

地方文化の喧しく叫ばれてゐる際鄕土色の濃い個人句集が上梓され、地方文化の昂揚に資することは、まことに時宜に適した有意義な企劃であると思ふ。茲に惡筆を弄して、君が處女句集の門途を祝福することゝした。

人犯

後藤田凡生

バスが殆んど市の周圍部だけしか走らなくなつたのと、勤人がグンと急增したのとで、朝夕のラッシュアワーの市電の混雜ぶりときたら、全く、果物を盛つたやうだとの形容詞そのまゝで、故障車でもいゝ、たつた獨り切りで思ふ存分乘つて見たいと思ふのは近頃のサラリーマンの夢である。そのすし詰めの滿員車に乘つてゐるときである。フト肩の邊に水が落ちてゐるのに氣附いた、さてほ暴漢でも落しやがつたのかと、ひと巨り周圍の顏を睨めつけたのである。それから五分程して何氣なく、も一度見ると、また一つ新しいのが附いてゐる。〝ウーム〟この不埒な人間はどうやら傍らにゐる、ツンと濟ましたモダン娘らしい。しかし、注意してみるに別段鼻が惡いことも無さそうである。まして僕は男である。その女が加害者でないことにしたい。では誰だらうハテナ？電車が四ツ橋停留所を發車せんとした時その娘はあわてゝ

「あッ、降ろして頂戴ッ」

と叫んだ。途端にその赤い口から何か飛び出した。それは飴玉である。

僕は後委をぐつと睨んだ。

＝豆ニュース＝

★日本百貨店組合では商品券の發行停止を決定（十二・十八）

★二十五日香港全島陷落

★大阪府下中等學校入試方法本極り昨年度の點數制を廢止甲、乙、丙にわけて判定する（十二・二六）

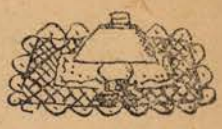
★二十六日第七十九議會開院

★京阪神三都の湯錢二日から一錢値上、大七錢中四錢小三錢（十二・三〇）

★毎月八日を大詔奉戴日と決定、從つて一日の興亞奉公日は廢止（一・三）

★大阪とその近郊都市で二月一日以後六才—十八才に綜合切符制でパンとウドンを配給、一ケ月一人宛食パン一斤味付パン八 生ウドン 四個（一・十六）

★衣料切符制二月二日より實施、但し慰問袋、千人針、オシメカバーオペラバック等は除外品（一・二七）



川柳 解題と句例

＝路郎選＝

(24) 羊羹

★「三國誌」や「戰國策」に羊羹の給與が不公平であることから兵士が不平の聲を島め、ストライキなどを起したといふやうな記錄があるが、此の時代の羊羹は羊の丸煮であつて彼等牧畜民族の日常の主食物であつたらしい。

★唐書には「洛陽人家、重陽作羊肝餅」とあるが、これは黑砂糖と羊の臟器などを煉合して蒸したものであらう。

★宋・元の時代を經て、明の時代には豆拶糕、羊羹糕となり「紅豆白糖成齋」とあるところから考察すると漸く菓子の範疇に入つたのである。

★我が國へは禪宗の留學生によつて、宋や元の文明と共に輸入せられ東山時代茶道の點心（羊羹を食することによつて恰も心に火がとぼるほどに疲勞を醫す意）として羊羹は缺くべからざるものとなつた。僧家では全然動物性を排し、植物性のみの原料でつくり、我が國の嗜好に適合するやうにしたのである。

★駿河屋岡本善右衞門が煉羊羹を創製して廣く賣出したのも其の頃で（天正十七年約三百七十年前）ある又羊羹の種類も色々と案出せられ四十八羹に及んだが、それ等は動植物や魚貝類の自然の形態を模したもので多くは形態の區別に過ぎなかつた

川柳 世界史

(XI)

戸田孤篷

(十四) 唐文化史

官制

ユーラシヤ大陸の西の方の文化が野蠻人に破壞蹂躙されてゐる頃、支那を中心とする東洋全體は未曾有の絢爛を誇る唐時代が始り、三省六部の制の下に名實ともに統一國家の榮譽を享受してゐた。

お役目に相應したる髭を持ち
玉座から見れば百官華に似て

田制、稅制

理想國家をもくろみはしたが、均田制はその缺陷を意識せぬうちに馬脚を現してしまう。

第五夫人耕し兼ねるほど貰ひ
蟲けらの樣な奴でも丁男さ

（男子十八歳を丁男として百畝の田を給す。內二〇畝を永久田とし、八十畝を口分田とす）

稅制は口分田八十畝につき粟二石を上納する田稅即ち租と毎年二十日間國家の力役に從事する丁稅即ち庸と鄉土の產物（絹二丈 麻二丈 四尺）を上納せしむる戶納即ち調とある。調を以て庸を免れしめた事が見える。尙稅額の査定も行ふ。

蓄へた絹で力役のがれる氣
まいないの包觸つて額をきめ

兵制

兵農一致、玄宗以後は募兵制、府兵の制といつて農閑期に兵を講じ交代で京師守備にあたる。

冬枯れの野ずらで孫子呉子を說き
安綠山ふせぐに募兵弱すぎる
綠山討伐募兵ガヤ〳〵附いてゆく

學制

長安には國子監その下に大學、四門學、律學、書學、算學の六學をおく。地方に州學府學、縣學あり。學校出身者地方試驗の合格者を更に中央に於て科擧と云ふ試驗を行ひ官吏に採用する。

松柏のしげりの中の國子監
朗誦の仕方も試驗官はみる

刑制

贖罪金つませて刑が論じられ

儒學

科擧の課目は文學と政治學唐代を通じて異論も獨自の說も出ず、儒敎の正しい解釋を追つてゐたにすぎない。

科擧課目になる經韻も鬼えられ

詩文

中國文化の極盛期、全アジアの人々すべては長安めざして千里を遠しとせず、詩題に選らばれたものにエキゾティックな情緖、君寵を競ふ後宮三千の美姬の生活、塞上塞下征戰萬里の從軍行など。飽和狀態にまで達した文化は同時代の日本人が萬葉集に表現した剛健素樸さはなく廢頹的な傾向すら帶びてゐた。

この道の果に長安あると云ふ
西域の手品で無事な祭の日
胡姬一人傳うて今日も札止だ
起承轉結官女の眉にふれてゐる
詩になる戰さは匈奴（フン）との長期戰

★現今では各地の名物として柿羊羹たの栗羊羹たの、いろんな羊羹が賣出されてゐるが、羊羹と云へば駿河屋といふことになつてゐる。

ようかんをいただいてると地震かな　豆秋

羊羹のことでもめてる老夫婦　路郎

羊羹のすこしかたいも舊家らし　同

(25) 屋號

★屋號といふのは商人が其の氏名以外に自己を表示するものゝ呼稱である。商人が屋號を使用するやうになつたのは、武家制度の餘波である商人は一般に姓氏を稱することを嚴禁されてゐたので商業上自己を表示する名稱の必要を感じ、屋號を案出したのである。

★屋號には、伽後屋、伊勢屋、山城屋と云つた風にその生國を表はしたものが多い。油屋・魚幸・たこ安などと、職業をあらはしたのもあれば、まからん屋などと店の堅實さを表はしたのもある。これと同じ意味で、わんぷらいすしようぷ (One Price shop) といふ屋號の店もあつた。

轉業をしても屋號で呼ばれて居　栞

屋號をば二つに割つて顔を出し　雅美

洗濯屋白い屋號をつけておき　春巣

統制へ屋號は副はぬ物も賣り　千斗

軒下の店にも屋號ありはあり　巨人

紀之國屋郷土のよしみだ泊るな　緑葉

一流の屋號塗末で見つけたり　馥乃

落ちぶれて屋號で呼ばれハツと寸　路郎

押韻はとぶる文字を又好み

李白

詩仙であり、酒仙である。大トラになつてゐても氣品を失はぬ。

醉うた醉うたと詩が一つ出來

睦眼の李白も衛侍もゆずらない

杜甫

科擧の試驗に及第しなかつたところからひがみをもつてゐた。詩がうまかつたので役人になれたものゝ面白くないものだらけ、遂に清貧のうちに一生を過す。

落第をしたことまでも詩になり

詩作のみ米櫃をみず壺を見ず

白樂天

逆境を知らぬ、平和な、幸福な詩人、和漢朗詠集に、香爐峰の雪に日本人に親しまれた。

硯箱きつちりおいて詩が一つ

白樂天今日も畫題のうちに生き

韓愈

三歳にして孤兒、刻苦勉勵儒學の主みたいな生涯、老莊を排し、佛骨表を奉つて自分のきらひなものは皇帝にも信じさせない。花鳥風月の樂しみなど知らない。

小理窟を末座で韓愈まだやめず

韓退之あはれお顔は皺だらけ

佛骨表釋迦は支那語を知らぬ人

「韓退之」天事に苦學生かゝへ

「韓退之」は書名

柳宗元

癖にさはつた度に詩が一つ出來、讒訴され、流刑になると名文を殘す。韓愈や杜甫と似た一生。

癖類の一歩手前で詩とはなり

詩が出來たハツト氣ずけば公文書

美術工藝

繪畫には南畫北畫が出來た時代。柔かいタツチの水墨畫が南畫であり、堅い線畫に極彩色をほどこしたのが北畫である。美術工藝の粹は我が正倉院の御物の中にのこる。

喰べ物が南畫北畫とちがはせる

天平史唐の言葉で綴りたし

宗教

孫吳空の三藏法師が經文と

りに印度に行つた時代、老子と同姓であつたので高祖武宗は道教にこる。キリスト教が支那に渡つて景教となり、ゾロアスタの秩教、摩巳教、フイフイ教の回教などにぎやかな。

佛教史吳空の事にふれてゐず

同姓のことを老子は苦笑する

長安見物景教寺院などもみせ

川柳漫釋 漫筆は動く

小畑自有浪

大陸で國民服の父と會ひ
（柳路）

「あらッ」
「おかしいなあ」
「此の汽車ぢやなかつたのかしら」
「おや、向うのホームからこちを向いて、にやッと笑つて敬禮して居るお爺さん、ありや一體何者かね」
「まあ氣持ちの悪い」
「氣ちがひかな」
「でも、どつかで見かけた樣なお爺さんだわ」
「うむ、さう云へば」
「こうつと、張家口でだつたかしら」
「熱河でだつたかなあ」
「あら」
「おや」
「あんた何云つてんのよ、あれ、お父うさんぢやないの」
「へーい、あの親父がね」
「ほッ〳〵〳〵、時勢は移るだわよ」
「國民服を着る樣に成つたかねエ」

ミシン屋を呼ぶアパートの二階から
（かほる）

「おーい、ミシン屋のをばはーん」
「おーい」
「又づぼんが破れたあー」
「あゝ左樣かあー」
「素氣ない云ひ方やなあー」
「ほなこの間の寫眞のロなあー」
「、、、、、、」
「あれにきめときなはれー」
「押賣は舊體制やあー」
「ほななんぼなとそんな不自由をしとりなはれえー」

薪炭車小火かと思ふ煙を上げ
（美知夫）

「呀ツー、火事や〳〵ッ」
「ど、どこや〳〵」
「横町やッ」
「うわあー、えらい煙や」
「おーい、防護組合長はーん居つてやおまへんか」
「はい、今日はあんた、ちよつと出かけとりましてな」
「ど、どこえ行てだしたんや」
「それがあんた、孫の聟が去年の防空演習に梯子から落ちよりましてな」
「こらあかん」
「今日見たいな日に留守にしよつたらどもならんな」
「はい、まことにどうも、今日は又、えんばとどこやらが火事やさうで」
「ど、どこやらやおますかいな、横町だすがな」
「あれまあー、どげんしよう」
「おーい、砂や〳〵」
「梯子が先やーい」
「むしろやあー」
「水が先やぞうー」
「順序を間違うたらあかんぞう」
「せやさかいにバケツやあ」
「あほう」
「何があほうやね」
「なんべんもあれ程練習しといてまだわからんか」
「さう云うお前はなんやね」
「何んやねとは何んやね」
「これ〳〵ッ」
「喧嘩はちよつと後廻しや」
「そや〳〵、それよりも二列横體ならべェー」
「のんきなことを」
「今日は演習と違ひまつせ」
「呀ツー、實戰や」
「燒夷彈落下ッ」
「場所は横町」
「進めッー」
「わいつしよ〳〵」
「わいつしよ〳〵」

國産の家庭常備藥
ルメルペ
ペルメル
PELMEL
効能
傷一切に
火傷に
打撲に
ヒビに
ケガに
虫刺に
蚊に
蚤に
南京虫除菌
本舗・大日本ルメルペ部

姉ちやんと呼ばせて歩く母であり
（信男）

「あれッー」
「なーんや」
「木炭自動車が機械いぢくつてんねやがな」
「しようもない、せやさかいにわえはあわてたらあかん云うとんね」
「ママ」
「あらッ」
「、、、、、、」
「又ッ」
「、、、、、」
「デパートへ來る時には、姉ちやんと云うんだつて、あれ程云つてきかせて居るのに」
「、、、、、」
「ねえ、こん度云つたらほんたうにママ、あらッ」

賽ころが飯屋の門に落ちて居た
（玲之介）

「おい〳〵、みんな、めしを喰うのをちよつとやめい」
「、、、、、、」
「こらッ、そこの隅は何故やめんかッ」
「へい」
「此處の門口に、この賽ころなる怪しからんもんが落ちと

つたんぢやが、誰か落した者はないかね」
「、、、、、」
「おいッ」
「、、、、、」
「だまつて居ちやあわからんぢやないか」
「、、、、、」
「えゝん、諸君ッ」
「、、、、、」
「諸君はいつたい此の未曾有の非常時局を何んと心得とるかッ」
「、、、、、」
「えゝん、こらッ、又そこの隅がごそ〳〵しとる」
「旦那」
「まあ聞けッ」
「でも、おつゆがさめてしまひまんのんで」

あゝさうか課長の場合それてすみ　（土農夫）

「おいッ、麻部君」
「はッ」
「君は今日出勤して居るのかね」
「はあ？」
「出勤しとるなら何故出勤簿に捺印をしとかんのかね」
「すみません」
「こう云うことはすみませんで濟むかも知れんが、そも〳〵社長の信任を得て、吾々が擔當して居る會計事務なるものはぢやね」
「はあ」
「おや、それは何かね」
「これがその」
「なあんだ、昨日の傳票ぢやないか、えゝん、まだ整理が出來ないのか」
「それがその、五十圓の支拂に、五十萬圓の傳票をお書きになつて居りますので」
「はつ〳〵〳〵、あゝさうかね」

あさましさ重つて戴く世辭を云ひ　（靜子）

「あのう、こんどはいつ頃に御無理が願へまつしやろ」
「配給の都合でわかりまへんな」
「ほんまにまいどすんまへんねやけんど、こんども又、這入りましたら、半斤だけでも賣つてやつてもらへまへんやろか」
「考へときまひよ」
「すんまへんな、あれ、まあ可愛らしい三毛ちやんだんな」
「隣のだんね」

不自由を忍べと父は酒を飲み　（柳秀）

「お父ッつあんの子供の時分なんかみい、そんな鉛筆ちゆう樣なぜいたくなもんは買うてもらはれへんさかいに、指に睡つけて机の上に手習ひしてやう先生に叱られたもんやなあ、そのこと思うたらお前等ほんまに結構なもんや、それにお前、まだ一寸も鉛筆があんねやつたら、大事にして半歳位、使はなどうするね、今日びのこつちや、ぜいたくは敵だ、とこぎり始末せにやあ戰地の兵隊さんに申譯があらへん、なあ、わかつたか、わかつたら阿呆の一つおぼえに勉强ばつかしせんと、明日から夕刊賣りにでも行つて、ちいと金儲けちゆうことも考えるんや、ほんまに大けな圖體さらしとつて節米の時節を何んと思うとんね、ほんまにしようもない、酒の最中にごて〳〵云うさかいにあんぢようさめてしもうて、のんだやらのまんやら、あゝもつたいないことしてしもうた。」

藝妓らに社長電話で呼び出され　（詩朗）

「もし〳〵、イーさん、へいあて千代香だんね、あら、あんたどなた、すんまへんねやけど、ちよつとイーさん呼んでもらへまへんやろうか、へい、イーさん云うたら、あのう社長はんだんねやけんど」
「ちよつとあてに貸しなはれもし〳〵、もし〳〵、ちよつとあんただあれ、まあ、秘書はんやおまへんか、もし〳〵」
「あんたらあかへん、わたえに貸しなはれ、もし〳〵、おい、秘書はん、あつさり禿ちやん呼んでんか、困る、あんたが何が困ることがおまんね、會社へかけてゐかんのやつたら御本家の方へかけさしてもろうてもよろしおまつかて、ちよつと社長はんにきいてみておくんなはれ、もし〳〵、あら、イーさん、ほつ〳〵〳〵、えらい御無沙汰を」

買溜めの話むか〳〵聞いてやり　（不水）

「ほつ〳〵〳〵、別に增稅位が怖い云う樣な非國民のつもりでもおまへんねやけど、何しろあとが代用品になるのがかなひまへんさかいにな、ついあんた手元に二三千圓遊んどつたもんだつさかいに、ほつ〳〵〳〵、おかげであんた、增稅の昨日と今日で二百圓程儲かつたなあ云うて、今も旦那はんと大笑ひしましてな」
「代用品と申しますと」
「何んぞ又、しようむないもんが出來まんのか」
「へい」
「ほなそれも今の内にちいと買溜、いゝえ、買おきしとかないきまへんが何んだす」
「棺桶が紙になりますさうで」

Sata Special Klinik
呼吸器病科
内科
診療 毎日午前
醫學博士 佐多愛彦 電話 88
醫學博士 加藤謙一
醫學博士 螺良四郎 電話 1151
市電堂島中町停留所北辻西入
佐多醫院
大阪堂島北町 電話北八二八四

近作柳樽

選路郎

米もつて泊りに來いは面白い　兵庫縣 魚崎町　谷口　寒草
この藝者なれば十割惜しくなし　同
清貧はよし粉な炭の火にあたり　同
惚氣にはあらず戀人字がうまし　同
捨て難き手紙まとめて燒く日來ぬ　同
帝大を出てゐるだけで出世する　同
字を習ふときの氣持も禪に似て　同
だってとか吐かしパーマ派手と成り　大阪　石田　沐天
來ても欲し來させてならぬ廓の灯　同
配給で添うた女房でないものを　同
人間に番號があり手帖あり　同
献金も捷報といふ嵩に成り　同
嬢はんが乘ってこませのペタル踏も　同
坐禪して來たと時局を勤めの娘　東京　山田　宙望
公用へ母かしこまりかしこまり　同
葬儀車の哀愁もなく風を切り　同
歸還して母の炊事を佗びしがり　同
松除れてかるた一枚掃き出され　同
子を欲しくいろはかるたを讀んでやり　同

催促文氣が小さうて反古になり　大阪　橋本美奈子
物干で女中我手をいたはりぬ　同
國あつての我が身の事を忘れてか　同
寒くなるぞ藥はないぞと十二月　同
娘から娘へ無駄な文がくる　同
留守番の甘栗爪が痛くなり　同
東條さんの顔だけ見えたニュース館　神戸　平川　久枝
徴用の娘セーラー服で發ち　同
配給の炭屋軍艦マーチで來　同
碧い瞳はだから好かぬと祖母の論　同
おじぎするしなを知つてる日本髪　同
胸の透く朝飯前のこのニュース　姫路　小川靜觀堂
遺棄死體中に鰐あり象も居り　同
死守せよと嚴に命じて逃げ出す氣　同
連峰の雲から全機還へり來る　同
禁酒から甘黨とあり呵々とあり　同　横川　美柳
やっと間に合ったを見れば履き違へ　同
勝つ國の銃後ラジオが鳴り續き　同
世の動きうごけば動く時の人　同

吉川英治著
日本名婦傳
新刊　價一・八〇　〒一四〇
内容
大橋公夫人
太閤夫人
山陽の母
谷干城の妻
小野寺十内の妻
細川ガラシヤ夫人
靜御前
田崎早雲の妻
わが母の記
古代日本に咲いた華々

一家言叢書(一)
三和銀行副頭取 岡野清豪著
金・物・心　〒二・〇〇　一四

松波治郎著
梅田雲濱(下)　〒一・八〇　一四
上卷(一・八〇)好評再版出來

生田　葵著
和氣清麿　〒一・八〇　一四

佐藤一雄著
物語詩
日本名婦讃歌
一・五〇　〒一〇

全國書房　大阪東吉橋　振大六四八二四

英靈に別な覺悟で捧げ銃　滿洲　西垣　錦風

子煩惱の日

頬ずりへ夢でよかつた不精髯　同
父さんと問へばバンザイと云ふ便り　同

ルーズヴエルトに

誇張主義今更穴へも這入れまい　同　同
店先で云ひ勝ち何も買はず去ぬ　岡山　岡田　笛六
告知板腹が立つことまで書けず　同
立讀へ奥の視線が根負ける　同
制服で來る友達と氣が合はず　同
年頃と云はれた頃もなつかしく　和歌山　秋月　宏方
囚人は金も物資も知らず生き　同

養鶏業に休日なし

仕事着の儘で初日の出を拜み　同
小しずくにも滿語を入れた娘の便り　島根縣横田町　新出谷百合子
常會の下駄女のは隅にあり　同
無遠慮がいつそ好かれた歸還兵　同
出勤を見送る妻もしなびて居　廣島　大山　露斗

英米國慘敗

日本刀こう迄切れるとは知らず　同
いいうでを持つた養子の無口なり　同
もの言へば寒し敵性啞になり　山口縣小郡町　長野　井蛙
播いた種誰に刈らさう華府會議　同
日記書く子にも忙はしい大戰果　同
英米機風に木の葉の散る如し　大阪　中西　彌生
相性は悪くなかつた未亡人　同
路地口の輪替師走の音を立て　同
債券の賞與隣りも軍需工　名古屋　松井　靜子
燒香所人皆凛と歩を正し　同
麥踏の母も合せる子の軍歌　同
車掌みな去年のまゝの顔でゐる　大阪　野元　吐空
床の間に本積み重ね一人住む　同
石橋をたゝく男の散華せり　同
押賣にまだ〳〵馴れぬ話ぶり　大阪　桝岡　詩朗
居眠つてゐるのかサワリ聞く姿　同
大阪へ來てまで頭ちぐらせる　同
病女もう戀愛ものも讀み飽きて　豐中　澤久つらら
百何版著者は泣きつゝ書いたとさ　同
隨筆を書く閑のある實業家　同
片づけるではない古物屋の掃除　大牟田　松島　波人
戰機滿つけふも海軍さんが征く　同
社長室の花替へと通ふか面白い令嬢　同

夜の善光寺

合掌のよわさへほのか御燈明　長野　堀内　敏郎
人の死へ表情もなし常夜燈　同
惡心にふれんとすれば鐘の音　同
松茸に似た淑髪が前を行く　大阪　八竹　正柳
終ひ風呂雫が落ちる音がする　同
學者てう老眼鏡を無造作に　同

日米開戰

引き抜いた日本刀に曇なし　松江　本庄　快哉

娘等の常會を開く

うちの娘は少しくづれた坐りやう　同
靴下の穴を見せ合ふ閑な事務　同
病人の不滿粉藥ふきとばし　岡山　岡　眞理子
美容院フランス人形すゝけてゐ　同
ベル押して組長さんが朝早く　同
一ト旗を何んで上げよかなと思ひ　神戸　酒井　新吉
子を背にしばり銃後を守り抜き　同

生活を明朗に！
人生行路の
好伴侶

麻生路郎著

新川柳評釋

發行所　不朽洞

堺市出島海岸通二丁目一八一番地

振替大阪三〇三九二番

價　一・八〇
〒　〇・六

但シ海外註文ハ實費送料加算ヲ乞フ

能律增進ノタメニ
川雜投句用箋ノ御使用ヲ
オ奬メシマス
一冊　價・一五　〒・〇三
切手代用可

君のため庭のきく菜を引いて來る　同
二代目へ名人期待かけて居ず　香川縣　早馬　清富

母の死に詠む

陽の暖さ葬式出してから感じ　同
賣切になつて自分の番になり　同
此の宿の女中三階までの聲　羅津　多田　海朗
骨董屋に行けば佛も拜まれず　同
履歴書に士族を書けと祖父は云ひ　同
蔣すでに石川五右衛門にも似たり　松江　岡崎　祥月
五五三、三の强さを拜んだか　同
奉仕隊手傳になり邪魔になり　同

或る不幸な女へ

定まりし運に勝拔く手内職　大阪　浪花駒志希
元朝を泣かずに起きた子と祝ひ　同
襟足の魅力泣くのはやめてくれ　同
本社から來ました聲の大き過ぎ　鳥取縣　田中　弘樓
理髮屋はさつきの人に借りた智慧　同
河豚料理やゝ愼重にはしを取り　大阪　米田　春童
机上論俺はすかぬと親父云ふ　同
叱られて叱られてまだ嘘をつき　松江　大和　太郎
我儘を許せと家を捨てるなり　同
夜警して犬の寒さもわかりそう　尼崎　江口　正路
洗濯のシヤツもひらめく占領地　同
捷報に勿體なくも湯にひたり　尼崎　長谷川三司
新家庭出すスリツパは燃えるやう　同
泥棒が獨身だつた事を知り　神戸　市川　治男
夕刊にのつたスパイの憎い顏　同
初風呂に子供の年をたづねられ　金澤　入口　障子
初風呂に猿又のつぎシヤツのつぎ　同
立志傳俺ははたちだもう駄目だ　愛媛縣松前町　佐伯　鶏城
あんな頭飯も炊けない女だろ　同
遺家族慰問笑へる話たんと持ち　名古屋　八幡　勿來
煙突も一月二日黑煙り　同
卷たばこ賣切れましたと編み續け　愛媛縣菊間町　岡田　香桐
席を取る迄を賑はふ女客　同
一月一日今日は鳥居へ列となり　大阪　松浦　帆船
雪の上汽車の煙の影もよし　同
Z旗を忘れてをつた眞珠灣　愛媛縣大洲町　米澤　曉明
重慶は食道癌にさも似たり　同
同情はしますが金は出せません　松山　沖原　綠風

儀農作兵衛の墓

作兵衛は瑞穗の國にある歴史　同
逃げ遲れた姑娘に茶をよばれ　南支　米谷松太樓
歴史は夜創られる壯烈なる戰死　同
敵前上陸やはり日本の御家藝　神戸　湯淺小城子

日、タイ攻守同盟成立

ビブン首相タイの歴史の人になり　同
内職がすんでやさしい母となり　丸亀　馬場　浪二
ざわめいて來るあたりから時の人　同
配給品お世辭なんにもならぬもの　朝鮮　松田　幸士
木炭車道ばた汚すなともいへず　同
氣の弱い主任の下で勤務する　大阪　佐野　牛步
夢だつた百一年の香港市　同
ハンドバツグ一人稼いだ日を思ひ　大阪　清水すみ子
貧しさを云はず二人の子が育ち　同

修養綺談

篠山　籌彦

甲「時局柄や肚を練らなあかん」
乙「そや！第一に禊ぎ」
甲「うん結構や」
乙「それに坐禪」
甲「成程云ふだけは云ふなあ」
乙「然し坐禪は下手にやると鬼に魅ることがある」
甲「何んでやそんな事ないやろ」
乙「お寺の庭の石の上で結跏趺坐してたら病氣になつた」
甲「何處悪したんや」
乙「寺での病氣や痔に決つてるが」
甲「人をおちよくつてるのか」
乙「それ以來坐禪はやめた」
甲「惜い事やつたな」
乙「その代り毎日禊ぎやつてる」
甲「ホーウ一向知らなんだ」
乙「誰も行かん裡に行つてな」
甲「えらい精進やなあ」
乙「ザザーッと軀を洗うてからに少々冷いのを我慢して入る」
甲「一寸凡人では出來んね毎日」
乙「暫するとゆるこうなつて來る」
甲「そんなもんかいな知らんが」
乙「よう温つてから石鹼使うて擦る頃には滿員や」
甲「何處でやねんそれ」
乙「裏通りの風呂屋でやがな」
甲「？……？……？……！」

看護婦の對抗意識外科内科　大阪　久保甲斐郎
古本に下手な時代の專太郎　同　新出谷一聲
師走ともなれば見付かる捜し物　島根縣　同
酒豪とは物資の豊かなりし頃　大阪　有馬　千斗
ふくらし粉男が買へば所帶めき　大阪　同
洋裁を習ひに長い袖で來る　大阪　安井　青史
新聞の受け賣りだなと思へども　大阪　同
戰捷に醉ふなこゝには遺族あり　大阪　武部香林坊
勝ち戰ラジオが賣れる時が來た　同　吉岡　遞兒
隣組壁に貼るもの多くなり　和歌山　田島　破皷
戰場に父を持つ子の頰の艶　兵庫縣　同
日本は勝たねばならぬ工場の灯　大阪　富岡　巨人
死を超えた姿かまきり枯葉色　兵庫縣　同
朝の河岸寒くないぞと怒鳴り合ひ　京都　奥田　杜的
預金して出る銀行の扉も輕し　同　宮森　品枝
受話機ガチヤリと損をした顏　松江　同
一列は個々の立場で順を待ち　布施　有木喜代子
鐵磨く織手戰を意識して　同　奥様と女中と犬とうつされる
恥しい時の袂のおきどころ　大阪　中野　延枝
娘とてヤスリ持ちます職に就き　大阪　橋口　松嵐
午後五時を待つ客席の阿呆らしさ　岡山縣　金政　細泉
白足袋もまじつてはやる立喰屋　金澤　山野　一角
母さんに甘える年もいつか過ぎ　長野縣　佐二木千隈
奥様と女中と犬とうつされる　大阪　吉村つとむ
冬ならんゆきかふ人の走りやう　大阪　井上　賢二
夕刊を取る手冷たき寒の入り　島根縣　西村　北斗
國策へ手となり足となるばかり　大阪　松永　青雲
ソロバンを捨てゝ働く氣のかるさ　大阪　丸島　利生
戰事ニュースラジオのプロに不平な　東京　潮田小目附
見ぬ振りをして見る歳の十五六　大阪　吉村つとむ
着飾らぬ僕へ飲めない友が來る　大阪　井上　賢二
バスゆれて故郷に近い雪となり　島根縣　西村　北斗
用も無く出て來て人の出をぼやき　大阪　松永　青雲
意地と張りすてゝ佛書に親しめり　大阪　丸島　利生
親子喧嘩始まり出して歸省すみ　東京　潮田小目附
本年も宜敷たのむ隣組　大牟田　平島　平人

勅題

連峯の雲のまにまに一機二機　松江　恒松　叮紅
生きてゐて今日の嬉しさ眼鏡拭く　大阪　山本　葉光
廻覽板隣りの遠い雪をわけ　島根縣　西村　早苗
もう寢やうあの音たしか終列車　青島　菖蒲　榮城

病院にて

附添婦給料だけの仕事をし　大阪　古川　鶴聲
時は師走世は電擊の忙しさ　兵庫縣　幣原　節女
軍隊に似たマスクだが眉長し　大阪　宮田　不二
人間も超越すれば怒りなく　諏訪　牛山　臥牛
大空に國威を語る旗の色　岡山　露野　蘭
ボーナスか闇かかき船の灯が搖れる　大阪　藤森小雅子

歳末警戒

芽をふくは何日か夜警の灯が寒い　松本　岩井　汗青
翼贊へ仰せ長み紙芝居　愛知縣大府町　粟津　松造
豫期すれど其の捷報の大きすぎ　布施　上田　翠光
老眼鏡むすこ三人銃を執る　大阪　谷崎　一昌

音感教育

甲「イーローハーニーホー」
乙「イロハまだ知らんのかいな」
甲「昔のドレミファを今はこうやるのや覺えとけ」
乙「アーチイチイバッパか」
甲「それは子供の唱歌やがな」
乙「ワンさん待つてゝ頂戴ね」
甲「何云ふとる音樂の基礎音感を研究しとるのや」
乙「南無觀世音菩薩ッ」
甲「何んじやそれお經やないか」
乙「觀音さん云ふさかい一すうちの婆さんの眞似してみせたんや」
甲「嗚呼學の無い奴は哀れや」
乙「えらいすまん昨夜買うたで」
甲「えゝ?」
乙「富士山に鶴が飛んでる額夜店でひやかしてゝ買はされたわい」
甲「小人奢ひ難しか」
乙「今日は物が少いでなあ」
甲「唄の勉强してるねんで」
乙「何や唄かそやろ思ふてゝん、梅は咲いたか櫻はまだかいな…」
甲「そら小唄やなあ」
乙「旅の衣は鈴懸けの……」
甲「長唄も知つてるのか」
乙「これ小唄やあと知らんもん」
甲「成程お前の云ふことは何でも邦樂（方角）違ひやな」

隨想

丹波の猿公、猪公、其他 (三)

小山文三

進む事を知つて退く事を知らない強い田舎武士を、猪武者と諺へる如く、眞に猪公は人を襲ひ、兎を襲ひ、狸を襲ひ、鷄を襲ひ、凡そ外敵と目ざす處、場所と時を論ぜず所謂猪突の勢凄じいので、卷狩の勢子や獵人も別に山刀を用意して、飛びかゝつて來る猪公の萬一に備へて居るのであるし、猪山に用ゆる勇猛な獵犬でも、屢々此襲撃の犠牲になるのである。

昔新田の四郎は猪公と角逐し、山中鹿之助や阪田金時は猪公をも遊び相手としたとあるから、其技は誠に神に入つて居たものであろう。

○

十二支の猪は亥である、陰暦十月上の亥の日を猪の子（亥の子）と言ふ。此日亥の刻に餅を食へば萬病を除くと言ひ此餅を亥の子餅と言ふと物の本に書いてあるが、筆者の生國では秋の收穫の最中の此日に糯米の新穀と新小豆を以て亥の子餅を造へて、之れを一升桝に盛つて籾摺り臼に供へる習慣があつて、猪公の作物を荒さぬ樣に祭るのだと言傳へてゐるのである。

此特に一升桝に餅を盛る事と籾摺り臼に供へる事とに興味が深いが筆者不敏にして、民俗學上因て來る處を知らないのである。

丹波の亥の子餅は美味い。時は恰も味覺の秋であり、新米の粘り强さと、新小豆の香なぞ若かりし昔の追憶を新たにして砂糖不足の今日でも尙垂涎を禁じ得ないのである。

○

亥の子の日から火燵を開くのも丹波の習慣である。火燵には堀り火燵と置火燵があるが、古い家では悉く堀り火燵である。

火燵と猪公には何の關係もないが、山陰の秋時雨する亥の子頃には大方秋の收穫を終つてぼつ〳〵夜寒を感ずるので、誰れ決めるとなく此日を火燵開きと定めたものであろう。

石炭不足、炭不足の今日では、年内暖房制限も止むを得ないが、丹波の火燵開きを延ばさせるにも及ぶまい。

○

獅子と猪は音律を同ふしてゐるが全く別種の動物で、親類筋ではない。況んや丹波の猪公をやである。

牡丹に唐獅子の合言葉から丹波の笹山の猪肉をぼたん肉なぞともぢつてゐるのは凡そ意味のない事である。

『咲いた櫻になぜ駒つなぐ、駒が勇めば花が散る』の俗謠から、馬肉をさくら肉と言つて居るのと同じ樣なこぢつけであろう。

○

猪肉は期節に因ては牛肉よりも美味い。春ともなれば一種の臭味があつてうまくないが、嚴冬雪深い頃には脂肪多く而もあつさりして牛肉よりもうまいのである。

牡丹餅を食つてうまかつた感じを表すに丹波では、頰べたが落ちる位うまいと言ふし手造りの濁酒を嘗めては舌が溶けそうだと言ふし、猪肉を喰つては鼻が落ちる位うまいと云ふ癖がある。

遊蕩の結果、三等症で鼻が凹んだりすると夫れは『猪喰つた報ひ』と冷笑するのである。

猪喰ふた報ひの諺の語源は古く遠く丹波に胚胎してゐるらしいのである。

○

昔丹波のさる地で足を傷ついた眞白い鹿が表れて倒れたので、其地の人々が丁寧に葬つてやつたが、いつの間にか足痛に惱む人達が香華を供へる樣になり、其後祠が建ち鳥居が建つて、名も白鹿神社と呼ばれて、足痛平癒の神として信仰するに至つてゐるのがある。

斯樣に愛す可き鹿には神樣に祭られたのがあるが、猪公に至つてはまだ丹波に於て神樣に祭られてゐるのを聞かない。況んや眞白な猪公なぞ聞いた事もない。

蓋し猪公の樣な、强い猪突主義だけでは未だ廣く人心を收攬するに足らない爲めであろう。

○

丹波にふさはしい『栗の猪喰ひ』と云ふ言葉がある栗の澁皮はものかは、厚皮の外皮もむかないで其儘喰つて嚙みながら、不消化な厚皮の部分だけを吐き出すのを猪食ひと云ふのである。

ナイフを持たない猪公が山の落ち栗を喰ふのにこの通りである處から、此言葉が生れたのであろう。腕白盛りの山の子であつた筆者の昔が憶ひ出されてなつかしいのである

○

亥歳生れは押しが强いと云うし火事は大てい亥の刻に炎上すると云ふし亥の子地藏なぞもあつて猪公に關して語る可き事は盡きないが、後日の研究にまつて此邊で擱筆する

同舟近詠

松山　前田五健

火の色は千二百度か陶透ける
つぐ〳〵と食器としての陶器見る
屑陶器陶郷の子の怪我もせず
陶ロクロ忽ち花瓶手から湧き
神雷神火米英よソレ見たか
米英へ眞向梨割脊負投

範士中山先生より「威剣決浮雲」を戴きて

火の玉の一人こゝにも刀拭ふ

朝鮮　池田可宵

撃沈のあとは鏡のやうな海
石の村の橋石の學校石の村

兵庫縣御影町　長崎柳秀

新妻の立ち居に風は香をとゞめ
親權は弱し不孝の尻を拭き
血迷うた蜻蛉へ教師うす笑ひ
だいじよおまへんお使ひと隣組
失戀の机の位置を替へて見る

鳳凰坂　菊川泰平樂

獨身寮覇氣のやりばの唄になり
イニシャルの文字が讀めない露西亞漬
太太と第三夫人仲が好し
義足ならし看護婦さんの肩を借り

神戸　潮田明坊

盲目判絞った智惠に目もくれず
親心ひがますまいの爲替組む
我が服も古りぬ木葉の散りかゝり
師走某日の社前のもの靜か
華やかに裝ふ女喫ひはじめ

二十五年前入營當時回想

儂が父ぢやと中隊長一寸反る
御心配無用と父母へ書いて泣け
わだかまりなどなし天守閣仰ぐ
十二月出て行く用へ灯が點り

名古屋　鈴木可香

役所では階級がある君と僕
花持つて來て挿す程度女事務

奈良縣　嶋田翠峯

前線は甲乙丙の隔てなく
藥取り暑い寒むいは云ふとれず

山口縣　三原狂路

臨終に似て消炭の細りゆく
豆債券子の抽斗へしまわせる
死んだ子の席が空いてる新學期
十二月八日、米英へ宣戰布告
神代から無禮に應ふ道があり

扁桃腺炎
感冒
中耳炎

化膿性疾患の
内服短期療法

扁桃腺炎、中耳炎、流行性感冒、丹毒、面疔、淋疾…その他化膿症に對し、アルバジルは内服により、直接その病原菌を克服、短期間に治療を促進し……

一、發熱、疼痛、分泌物の消退
一、再發の防止……等の目的を達成せしめ得る！

殊に、品質優秀にして副作用少き点＝使用の安全性＝は本劑の大なる長所である！

包裝・二十錠　五十錠・百錠

アルバジル錠

發賣元　山之内藥品商會　東京・大阪

柳川にうまを拾ふ

鈴木石鹿

馬の肢體

馬の肢體は何れも特色がある。その特色からさま〳〵な俚言が生まれてゐる。

をもざしは馬に似てゐる御曹子　浅女

火の姿賦と揺れ尾と揺れる　耕一郎

馬の尻頼んで嫁は通りぬけ　古句

馬の背の句

夕立に馬を半分ぬらすなり　同

生きた目も抜くは馬のくされ市　同

鳴子道は法華寺の妙法寺の近く

馬の耳念佛聞かぬ鳴子道　同

馬の耳に風大名に聲色　同

馬ほどな牛を局は持つてゐる　同

最後の句の局は大奥の女中達を指してゐるし、牛の說は遠慮さして頂く。

馬のいろ〳〵

馬の種類も多いが、手許に川柳の資料が尠いので一部しか掲げられぬ。

驢馬

驢馬はあるが、騾馬の句が見當らぬ

驢馬の尾と蠅とひねもす村はづれ　柳路

支那馬

支那馬の目に抗日の色はなし　美知夫

親馬と仔馬

親馬仔馬地に影ひいて　町二

神馬

神馬は奉納馬とも云ふ。

神馬もう豆にもあいた目をつむり　鐵洲

神主の口にとらるゝ納め馬　古句

白馬もたしかにおがむ御神託　孤蓬

縞馬

斑馬とも書きアフリカ產。

縞馬は湯上りを着た姿なり　豆秋

河馬

偶蹄類だから馬ではなく牛の親類だ。

しんどうそうに歩いてる河馬　金坊

牝馬

牝馬と並ぶ牛の根性　古句

瘦馬

佐野源左衞門常世が故事以來川柳に瘦馬は多い、人間にたとへたのもある。

顎で蠅追ふ樣な馬常世持ち　古句

瘦馬の踏んばつても〳〵ぶたれ　大鷲

瘦馬の力にたよるひと五人　テツオ

駄馬

駄馬の句は多いが古句を見るに、

から樽をみんなおろすと馬に成り　古句

駑馬

駑馬とはしゆん馬の反對だ。

轉業の或る日を駑馬にさも似たり　九坡

病馬

煩ふ馬を澤瀉へひく　古句

めくら馬

柳人の目はよく屆く。

めくら馬裝がさはれば口を明き　古句

駟馬

四頭立の馬車馬だが、大公望の故事を詠める句に

何か喰ひますと駟馬から下りて聞き　古句

種馬

種馬の句は人間の句である、小糠三合持てば種馬となるなかれ

種馬と成り候か此賀狀　沐天

種馬にしても彼奴はうまくやり　光路

はね馬と放れ馬

何れ劣らぬ恐しき馬ではあるが、馬らしき馬とも云へようじや〳〵馬はヒステリー性の女である。

はね馬に逃込む顏の久しぶり　古句

八九丁先きで奔馬は泡を吹き　可章

はなれ馬さいを握つて追つかける　古句

じや〳〵馬

ジャ〳〵馬が夫びいきとなつたそな　美根子

繫ぎ馬

『繫ぎ馬』は平將門の紋所でもある。

繫がれた馬綱だけの草を喰ひ　古句

はなれ馬よりさわがしいつなぎ馬　同

落馬

古句にある落馬には、①僧正遍照の女郎花と落馬、②今井兼平の落馬を見る。

高倉院の御落馬の句があるが一寸見當らぬ。

一　花より外知る人もなし御落馬　古句

二　兼平は立派に落馬した男　同

旅役者落馬で所作のとこを拔き　同

裸馬と水馬

裸馬橋をかぎ〳〵渡るなり　鴻峯

水馬演習河童寄るまいぞ寄るまいぞ　五健

屋根船のもく禮水馬しらぬ　古句
ふり

馬の利用

馬の利用もいろ〳〵ある。駄用、輓用、乘用が其の主なるものだが、駄用は駄馬の句と重複する故略して、乘用から

乘用

馬の句の大半は乘用馬である

文學を輕んじ馬で褌野行く　路郎
在鄕醫者何ぞと云ふと騎馬で來る　古句
遠乘の供ひとりふえ二人ふえ　同
馬馴らし終へた元氣な二等兵　吟二

軍馬

乘用、駄用、輓用何れもあるが、最近の柳誌を飾る馬は悉く軍馬であるは當然だ。そして廢馬となり、戰死馬となる。

街の巾徽發の馬ひかれゆく　草水
召され行く雲馬脊中の子にも見せ　可宵
馬方と馬別々に支那に往く　豆秋
夏雲へ馬吊り揚げし輸送船　銃人
船底に喘ぐ軍馬も國のため　青兒
決死隊闇に動いた軍馬の瞳　梟人
慰問品馬は肩こしのぞき込み　一鑑
大命を果す軍馬の白い息　文醉
廢馬嘶く泥濘赤き陽をはじき　玲之介
戰死馬へ勇士も擧手の禮をする　利生

愛馬

これあるが故に人馬一體の日本軍は强い。

馬に草やるを忘れず兄は征き　嬰人
愛馬の死ラツパへ捨てる氣になれず　紅多呂
馬子の情か馬の帽子よ　巨人

競馬

利用か惡用か知らねども、それは歷史の判斷にまつのみだ

大穴の夢を見てゐる淀鳴尾　富士
馬券買ふ女の肌の見えすぎて　由布
鼻の差が穴となつたる二百圓　靜波
草競馬損をした身に雨が降り　蒼美

加茂の競馬

昔から有名な競馬で毎年賀茂の祭に行はれたる神前の奉納行事である。

競馬より木の梢を見て笑ひ　古句
競馬最中はなれ牛〳〵　同

流鏑馬

馬を馳せて鏑矢で的を射る騎射の一法式である。

流鏑馬の供辨當を萩で喰ひ　古句

早馬

電信、電話、汽車のない昔時にあつて最もスピーデーな通信機關たる早馬!!

十五足早馬の出る不慮なこと　古句

馬車

懷しい明治時代の乘用馬車も殆んど姿を沒してしまつた。が最近又臨戰型の馬車を見るに至つた。これは自動車の舊い車體を利用したもので車輪もタイヤであつて仲々乘心地のいゝものである。支那や滿洲ではまだ〳〵重要な役割をしてゐる

松並木昔を偲ぶ馬車が來る　綠雨
うつかりと花嫁の馬車やり過し　水車

荷馬車

は馬力とも云はれて、重要な運搬具である。

スピードを別に荷馬車の動いてゐ　亂調子
馬力來て馬のお腹となる出口　葭乃

馬橇

雪深き北國に行けば詩情豐かな鈴の音

逃避行馬橇の鈴の音もよし　柳秀

曲馬

悧巧な馬の性質を利用したのが曲馬である。兩國には江戸時代にあつたらしい。

サーカスの馬は勝手に歸るなり　舟々
凸の字に橋から見える曲馬小屋　古句

馬の皮

昔から馬の皮と云へば太鼓である。

馬の皮たゝくも午の日の祭　古句

馬の肉

一名さくら關西の畑ではない

さくら鍋向の寄席は浪花節　劍花坊

愚談

小畑有浪

仕甲斐

「苦勞をしろ苦勞をな、人間の男にやあなられねエ、俺なんざあ、こう云うとなんだが十四の時に國をとび出してよお店奉公を十年、うどん屋の出前持を三年、印刷屋の外交を五年、工場働きを七年、土方稼業を九年、炭鑛の渡り者暮しを七年あまり、まだ其間にもこまごまと、ありとあらゆることをやつて苦勞に苦勞を重ねて來たもんだ」

「それで、何か苦勞の仕甲斐がおましたんで」

「何をッ」

「すんまへん」

「此の野郎ッ」とおつさんは鑄掛中の釜を引きよせて、「馬鹿野郎ッ——、」と思は

陶畫一千雜錄

前田五健

陶畫一千數百揮毫（銃後奉公○○贈呈の爲め社命で松山より數里離れた山峽であり陶郷である砥部町へ泊り込みで行く）の書畫餘滴とでも云ふのが此の記である

○陶畫室へ入り込んで畫筆專念中、また自分の生活本據何々會社會計室とは別な空氣が漂ふて來る。以下は或日或日の出來事感想を記錄したもので或日の如き

「さあそれがいろいろ關聯して居て、左樣には行かぬ」

「じやこうすれば……」「それもあれに關聯して居て」

と何んでも彼んでも關聯に結びつける人が來た…ジツト考へると成程萬法歸一皆關聯して居る。窯業場員の皆なは此の人を關聯男と稱して居る。

○砥部と云ふ所は昔、吉野朝時代大森彥七の領地であつたらしく現在私が陶畫をやつて居る此邊をお花畑と稱して居る。隣村の廣田村の溪流は喜多郡の肱川へ流入し、同じく隣村の明神村の溪流は久萬町を經て仁淀川へ流れ太平洋へそゝぐ、そうして本町の砥部川は重信川に流入して居る山々との寄合にはさまれた半農、半陶の裕福な山之町である。福地櫻痴居士の大森彥七……松本幸四郎のよく演ずるあれだ……矢取川も砥部の附近にあるまた隣村の原町村には彥七の墓（供養塔かも知れない）が荒れ果てゝ街道の山裾に埃にまみれて建つて居る。歌人關谷朝子女史が「もの、ふの紅きよろひの袖に似て砥部街道の櫨もみぢ哉」……街道筋の小山溪谷には櫨が多い

○何んにでも唄があるが陶器作りの唄はあるかと聞いて見たら

「さあ唄つて居ては陶器は作れませんや」

結局陶器作りの唄はないらしい……モーターで陶土を碎くそれを練る、ロクロで各種の型にする素燒窯へ水拭き、ペーパ掛け、藥塗り、陶畫、本窯へ更らに何々の手入等、小皿一つ茶碗一つも容易には出來ない、本窯へ積込む時など火を入れる時などの眞劍さ、名工柿右衛門の心境も素人の自分にさへ判る氣がした。陶窯業者間には三神祭と云ふのがあり、火、木、土の三神を祀るのである

○こゝの役場の表門横に金刀比羅さんの小社がある。何んでも以前は便所の附近にあつたので、三役、町長、助役收入役が一ケ年中にバタバタと死亡したので、

「これは金刀比羅さんのお怒りだ」

と何所にもある老人連の指圖で、現在の場所へ御移し申上たさうな……

○世の中に老人が絶へぬ以上こういふ話はまた絶へないものだらう

○陶業者は常に土を扱ふ關係上さぞ手がアレて居るだらうと想像されるが實際は反對で手の綺麗な事は驚く程だ、ヘタな化粧品よりこの土の方が、よいと云ふ程だから以つて詳くは考へたらいゝ、いづれ科學的何んとか說明がつく事であらう、然しこれは燒かれぬ前の土を扱ふ人々の手で自分の如きは鉢を一千以上も扱ふと指が荒れて、おしまひにはある人の入智惠で三味線用の人指と親指へ入れる、あれを入れて、陶器を扱つた。

○御承知の通り陶畫は吳須（ゴス）で畫くので專門家は何んの苦もなく畫き且つ分業的にいろ〳〵の道具を使用してうまく仕上げるが素人は大抵、筆の調子が違ふので、

「オヤ」「コリヤ」

の嘆聲が出る……つまり陶畫用の筆が腰の弱い事、ウキスキーにやられた時のフラフラ加減と同樣だからである。

○ライオン、猿、鷲、狸、

ず叩いて、破つてしまつた。

辯　解

お寺で頓死した男があつた。

馳つけて來た男の親戚の人達に、坊さんは云つた。

「檀家違ひの御仁ぢやでな、わしとしては一文にもならんのぢやけ、おかしなことを思はん樣にな」

?病

神經痛專門の先生が、「腹が痛い」と、足をさすりながら寢込んでしまはれた。

正　體

「お化け」の體驗者を次から次へと探索して行つたら石塔へ行當つた。

轉　業

どうしても犬は鼠が捕れなかつた。

近火見舞

夫婦喧嘩の眞最中に、お隣さんが、より以上にどえらいのをおつぱじめたので、二人はびつくりして隣へ馳込んで行つた。

要　愼

要愼に要愼を重ねて、鍵の置場を忘れてしまつた。

鷲鳥、蟇、兎、雞、鶉、龜、其他ゴタゴタと居ると云へば動物園かと思ふが、これは皆作品で私の後ろに、並べられて居る。やゝこしい狸も居るが、スバラシイ鶉も居る、これが私の疲勞した眼をよく慰めてくれた

○百五六十年前、伊豫大洲藩主加藤泰候侯が着想して創製せられた砥部燒、その後幾多の研究が今日の砥部燒の名聲を產んだ譯である。獨特の色と優雅な質は相當に輸出されたが、現在では、昔よりの製型以外に、代用品の研究に努め成績を擧げて居る

○滯在中は時々その町の常會に招待されて一席、やらさせられた例の狸の話で明朗、度量を、クツ付けて笑はせた事もある、また或夜は案內されて淨曲會に行き上手下手なお里や熊谷、光秀を謹聽した

「コリヤ、モウ、やめい、」

「やかましい、默つて聞いとれ」

「モシモシ、あれは、あんた所の息子さんですぜ」……つまり親子が階上階下で野次つて居たのである

○陶畫一千餘、快ろよく畫けた日もあり頭が重く筆が重い日もあつたが、畫と川柳を遺したと思ふと、此の信念が大いに氣分を救つてくれた、一千枚ぶりの「神代つはもの」の圖の劍把へ一、〇〇〇といれ川柳人、また川柳人……謹詠と、記入したものも四五十枚はある。菓子鉢（萬能鉢）へ、神代つはもの、姬達磨、松山城、の圖を畫き、それへ「天壤無窮日本にだけある言葉」「聖恩のあまねし國旗たつところ」「國寶は無言日本歷史あり」等の川柳をそれぞれ記したものである

○話は以前に戻つて淨曲會のあつた夜遲く各地からの出演者の內、何人かゞ自分の宿へ泊つた、隣室で

「オイ東枕に寢ぬと寢られんのじやが、こゝは東は、どちらだい」

「お日さまの出る方さ」

「それでは判らぬどちらだい」

「お日さまの沒る西の反對へ向いて寢ればよい」

此の問答を襖越に聞いて居る私も東枕であつた○また或日は三都合併名優一座が來て隣室へ泊つた……赤ン坊の泣き聲がする……旅役者と赤ン坊……それをアヤス、若い女の聲……私は何んだか考へさせられた。その夜は山風が强く戶を鳴らして後には雨の音が聞へて來た……私は明日の入りを他人事ならず考へた……

陶畫一千土に親しみ土を撫て
陶畫一千秋より冬にいつなりし
吳須凍て陶畫の城のもり上る
三里炙今日の務めの午後十時

南洋語

須崎豆秋

花柳界では、半島人のことをやんわり「おとなりさん」と申し、「木村さん」と言へば冤嫌のいゝ日や惡い日があり所謂氣にムラがあつて扱ひ難いお客さんの隱語だそうです。

さて時節柄南洋語の二つや三つは知つて置かねばなりませんが、フイリツピン語で支那人の事を「インチキ」、畜生は「バカ」、馬は「イナナク」馬來語で地極か極樂かといふ意味のことを「ノルカソルカ」、內緖語は「コチョ〜〜」、臍は「ベソ」駄目だは「ベケ〜〜」、光ることは「キラキラ」、ジャワ語では雷が「ゴロ」混合が「チャンポン」歩くことが「プランプラン」で一寸日本語と相通して居りなんでもないやうに思はれますが犬のことをフイリツピン語では「アホウ」、と言つたり、フイリツピンのマラソン選手に「グズマン」と言ふのがあつたりしますから、やつぱり外國語はややこしい。

非特異性免疫元
オムニコ
トツメ
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
（適應症抜粋）
流感、各種肺炎、肺（膜）調炎、扁桃腺炎、中耳炎、蓋膜炎、其他各科、急性、慢性、炎衝性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し奇効を奏す。
（特　長）
注射無痛、副作用絕無、用法簡單、奏効迅速、價格至廉。
（包　裝）
三cc五錢入　三cc一〇錢入
一cc五錢入　一cc一〇錢入
一cc二〇錢入
發賣元　株式會社　黑田藥品商會　大阪・東京
一文獨量一

月評 作家指針

前號近作柳樽から

路郎・丹路・葭乃

本誌の月評が、作家指針として大いに期待されてゐるので、早春の一夜路郎、葭乃、丹路の三氏に社の卓を圍んで貰ふ。俎上にのぼした作品は總べて前號の「近作柳樽」欄の中から選んでいただいた。（編輯局）

日米會談

睨めつけた、寄つた、刀に手をかけた　（將　雄）

葭乃＝此の句の面白味は僅か十七字の中にタイムをよく表現してゐる。それと同時に、最後の火蓋を切るまでの行程を、切迫した氣持を、よく出してゐると思ひます。

路郎＝會談のせつば詰つたありさまを、「た」「た」「た」とたの字で三段に切つて此の句を一層差し迫つた情景へ追ひ込んでゐる。そうした手法が句境を飛躍させ、其處に此の句の生命が息吹いたのである。それから、此の句には餘切れに「、」を用ひてゐるが、これは不必要である。

○

千鳥啼くどうせ喰へない千鳥啼く　（靜觀堂）

丹路＝斯ういつた千鳥に對する觀方は、怎うしても川柳人でなくちや出來得ない鑑賞で云ひ換へれば川柳の眞骨頂をだしてゐるとも云へるが、此の句の傾向を眞似て、句作しやうといふ意識を働かせば臭いものが出來てくるやうに思ふ。此の句は千鳥と云ふ愛らしさのために効果もあがり、また臭味を生じるのを防いでゐると思ふ。

葭乃＝此の千鳥をからすに替へて「からす啼くどうせ喰へないからす啼く」としたら餘程、趣きが減じられる。何故かと云ふと、千鳥といふものは昔から歌にも詠まれ、裾模様の模様等にも波に千鳥と云つた風に、非常に典雅な分子を持つた鳥である。それであるのに「どうせ喰へない」と云ふやうな俗語を以て、せつば詰つた生活難を表現してゐるから、さうした反對の對照から來る面白味が出たのである。誰もが云ふやうに「どうせ喰へない」と云ふ言葉は川柳獨特の味を持たせる言葉であつて、他に例を引けば滿潮の「ABC、Dも交つたちよこ才さ」の「ちよこ才さ」のやうなものである。

路郎＝大體、千鳥と云へば極く感傷的なもののやうに思はれてゐる。その千鳥を作者は極く神經の太い人で、現實的なものとして「どうせ喰へない」とあつさり形付けて了つたところに此の句の面白味が出てゐる。葭乃が「どうせ喰へない」をせつば詰つた生活難と云つてゐるが、この句は單に、千鳥を喰へない鳥だと解す可きである。

丹路＝私もそう思つたし、生活難から歌つた句であれば面白くないと思ふ。若し、それならば、ありふれた感慨しか此の句から出て來ない。

葭乃＝「どうせ喰へない」と云ふのを、せつば詰つた生活難と云つたのは喰へないといふことが生活難の一番最上のものであるから、さういふ言葉で表しただけで、生活難といふことを此の句の重點に置いて作者は作つてゐるとは思つてゐない。

路郎＝それなら可い。しかし、せつば詰つた生活難と云ふ言葉を、斯うした句評の場合に使用するから意味が變つて來るのだ。

○

歸還兵たれ憚らぬ聲をする　（快　哉）

丹路＝「聲をする」と云ふのは松江の方言ですか？

路郎＝さうに限らない。「大きな聲をする」とか「大きな聲をするな」とか云ふから…

丹路＝つまり、聲を出すと云ふよりは、聲をすると云ふ方が無意識的なんですネ。

路郎＝態度を表してるんだね

丹路＝あ、そうか……

路郎＝從來、商人だつたり、會社員だつたりしてマチ〳〵の聲の表現をしてゐたものが、應召されて、急に兵隊語になつて、返辭一つするにも「ハツハツ！」といふ齒切れのいい聲になつて戻つて來ると、如何にも大きな聲をするやうに受け取れるのであるが、併し事、軍事に關するとピタリと沈默して了ふ。さう云つた兵隊の態度を髣髴させられる句である。ただ大きな聲で談すやうに解釋したのでは面白味が無くなる。

○

晝の月がひつかゝつてゐる枯芒　（彌兵衛）

丹路＝面白い句が多いですネこの人は……此の作者の句はみな無駄がなく、云ふ可き事をちやんと云ひ切つてゐる點で注目したい。「晝の月」の句、「椎の實」の句は同じやうな氣分の句で、作者がどういふ心境を持つてゐる人かといふ事が此の句から思ひ偲ばれる。「晝の月がひつかゝつて居る」といふのは如何にも川柳のいゝ味があると思ふ。

葭乃＝「晝の月」の句で、安川久留美さんの「晝の月汽車

の窓から見失ひ」といふのを覺えてゐますが、これは如何にも旅の淡い情緒が出てゐて忘れ難い句として殘つてゐます。久留美さんの句は情緒を表してゐて、此の人の句は畫の月の現れてゐる情景を出してゐる。強いて難を云へば、ちよつと調子が悪いやうに思ひます。

路郎＝素材から云ふと、畫の月と枯芒は、梅に鶯程に動かない。それだけに獨自のものとなつてゐない。「ひつかゝつて居る」が此の句のヤマである。調子が悪いと云ふ意見が出たが、「畫の月が」の「が」が音として、きつすぎるのと、「かゝつて居る」を「かゝつてる」と音を詰めないところから、響が悪くなつたのである。しかし「ひつかゝつてる」よりは「ひつかゝつて居る」の方が氣分は出る。氣分を活かすとなれば、少しく調子が悪くても「ひつかゝつて居る」とした方がいゝだらう。

○

風呂敷の一萬圓は安つぽし　（谿二）

馥乃＝一萬圓と云へば、せめて折鞄からでも出さうですネ

丹路＝「一萬金フ、ンと云つて草に寢る（路郎）」があるし「一萬圓位ひなか〳〵儲らず（谷刀）」の句があるので此の句の面白さが減殺されて、お氣の毒と思ふが、穿ちの句としては能く實感が出てゐて、捨てられない句だ。

路郎＝「やすつぽし」の「し」はどうかなあ……「やすつぽい」と云ふ方が自然であるが、「やすつぽし」といふ表現に何んだか滑稽な味が含まれてゐるやうにも思へて、この儘で許されて可いのではあるまいか。折鞄からでも出さうだといふ說があつたが、折鞄からも出るが、實際は汚らしい風呂敷からも出る。

丹路＝さよ〳〵。……貨物船が出帆するとき、一ト航海分の準備金を下關邊りまで大阪の本社から持參するのですが却つて古新聞で包んでゆく方が安全でつさかいな……。

○

一輪の大きく搖れたホツチキス　（子紋）

丹路＝やはり句を見てゐて、ハツと安心して喰ひつける句は、句に純粹性がある。此の句等も、物を觀る目に混り氣がなく、卒直に對象を掴んでゐる。

馥乃＝ホツチキス自體の性質を非常に能く出してゐる。

路郎＝一輪は薔薇か？場面も判るし、寫生句の上乘である。

○

子の欲しい夫婦鐵瓶磨きだし　（笛六）

路郎＝此の夫婦はもう初老を過ぎた夫婦らしい。お互ひに火鉢に向きあつて居ても、是と云ふ話題も無い。其ンなに時に子供の無い寂びしさが、お互ひの心にフツと浮んで來るものであるが、それを口に出しては云はないで、さびしさをまぎらすために、急に鐵瓶を磨き初めたのである。「磨きだし」の「だし」が少し強すぎるが、此の場合、これ以上の表現は出來ないかも知れない。

馥乃＝私が其の「だし」を一寸妙に感じたのは「だし」と云ふ言葉は突發的な行動を表してゐるし、子の欲しいといふ形容を前提にもつた夫婦といふものは餘程、久しい以前から、子が欲しいと思つてゐた夫婦であると思ふのに「だし」といふ其の突發的な行動を表す文字が喰ッ着いてゐるところに、もう一つ呑み込めぬ感じがする。

路郎＝此の場合、磨きだしたのは突發的であるから、「だし」といふ突發語で可いのであるが、さつきも云つたやうに語音が強すぎるので「だし」が耳ざはりになるのである。

○

女工ちと足らぬ男を使ひ合ひ　（雨濃路）

路郎＝女工心理、薄ぼんやりした男工心理を巧みに捉へてゐる。男の方は色氣を感じてゐることさへ此の句から思はされる。

丹路＝男として、僕も思はず苦笑させられたが腹は立たぬ。そこに、川柳の川柳たる德があるんでせうね。

○

忠告に來て御馳走に振り向かず　（遲兒）

待望の句集出づ！

石曾根民郎
川柳句集

題字 麻生路郎
序文
裝幀 小林朝治
裝畫 關根準一郎

川柳句集「大空」の著者は信州の產。純情の持主。彼の句には彼獨自の個性が盛り上つて異色ある川柳を構成してゐる。彼の句は漫畫に出來ない句が多い。所謂川柳らしい川柳の境地から拔け切らぬ惱みを持つ川柳人の一讀を薦めたい。

B6版・和紙木版裝函入 定價 一圓（送料拾錢）

堺市出島海岸通二丁目二八一
發行所 不朽洞
振替大阪三〇三九二番

馥乃＝斯ういふ場合、忠告されてゐる當人は非常に辛いでせうなあ。「振り向かず」といふ言葉で、相手を納得させやうとする忠告者の強い決心が窺はれる。

路郎＝「はゝア、忠告に來たのだな」と思つたので、御馳走政略で忠告を排撃するつもりでゐたが、案に相違して相手は御馳走等に振り向かなかつたのである。狡い心の持主と、責任觀の強い心の持主との人間が對蹠的に窺はれて面白い。

○

おどろいた事におけさを子が唄ひ　（勿來）

馥乃＝おけさを唄つてゐる子供は其の歌の內容も解せず近所の聞き覺えで、鸚鵡返しに唄つてゐるだけであるが、聽いてゐる第三者の大人が一寸冷汗でも出さうな氣持をしてゐるのが見えるやうだ。惡く言へば子供までがコマシヤクレて、憎らしいやうな氣もする。結局その邊の感じを云つてあるのでせう。

路郎＝つまり此の句を讀んでも、孟母三遷の眞理が秘んでゐると云へる。

○

國の荷のがんぢがらみが又嬉し　（美柳）

馥乃＝此の句の「又」は蛇足であると思ふ。「又」があれば幾度か送つて來てることが判るが、この場合は中味を想像しながら紐を解くといふ氣持だけで結構である。

路郎＝國から送つて來たものが凡そ想像されて嬉しいが、其荷をほどくまでに、不細工な荷造でがんぢがらみにしてある樣子が更に微笑ましく感じたのであるから、「又うれし」で差支へはないが、それだけ理智的な匂ひが出て、よろこびの方が「又嬉し」と云つてゐるほどに嬉しさが強く出てゐない。それで「又」といふのが耳障り、ほんの僅かであるが、技巧上の難が感じられる。「がんぢがらみ」の嬉しさだけを特に出すとすれば「國の荷のがんぢがらみも嬉しけれ」とすれば、理智的な匂ひが消えるであらう。

馥乃＝それを「も」に換へれば「又」があつた方が良いと思ふ。その結び目の嬉しさがなほ強調されるやうである。

未亡人に出すお手紙へ氣をつけて　（美奈子）

路郎＝女性らしい穿ちの句である。若い女の人が手紙を出す場合には、よく「宅が宅が」とか「うちの人が」とがいふことを手紙の中へ書くものであるが、未亡人に出す場合にうつかりとそういつた文字を並べると、時には先方の感情を害しないとも限らぬ。殊にその內容が、のろけてゐるやうにとられる場合があれば、折角好意で書いた手紙も、却つて反感を誘ひ出したやうなヘマを生じるから、未亡人に出す手紙は特に氣をつけなければならない事を此の句によつて教へられるわけである。

馥乃＝此の句「氣をつけて」を「つける」とすれば、只社交上注意すべき訓示を聞かされてゐるやうであるが「つけて」と助詞で止めてあるばかりに句主の思ひやりの深さだけが素直に這入つて來る。凡て、助詞止めの句は意味を弱はめる場合もあるが、非常に餘情を持たす場合もあるから、これを作句の上に適宜に使ひ得られたら效果的である。

路郎＝この場合の「て」止めは確かに作者の細心と思ひやりが出てゐる。

○

心臟の弱さをお婆ちやんなげき　（春童）

馥乃＝この句は大分問題になる句です。心臟の弱いのはお婆さん自身だらうか、或は子供だらうか、孫だらうか。

路郎＝僕は孫の心臟が弱いのだと解してゐる。尤もこの場合の心臟は、俗に謂ふ「心臟が強いとか弱いとか」の意味である。

馥乃＝川柳には省略法といふものが、かなり自由に許されてあるために、此の句のやうにちよつと、どちらだか判らぬ場合が生れて來る。川柳家の頭で考へると、心臟の弱いのは勿論孫か子供であらうと思ふが、頭から川柳式の規則を知らぬものとして讀んだ場合、お婆ちやんが此の句の主格であり、「心臟の弱いのをなげき」がその主格に對する說明格の如くうけとれる。さう受けとつた場合には此の心臟の弱さは本當の心臟の弱さのやうにも思はれる。もう先の知れたお婆ちやんが自分の押の弱さを嘆く筈もなからうから……

路郎＝今の說明で大體盡きてゐると思ふが、此の句の難點は川柳的な約束を知らぬ人が讀めば、お婆ちやん自身の心臟が弱つてゐる（病的に）のをお婆ちやんが嘆いてゐるとより解する事が出來ない。

病床二旬

高翁

病床二旬、いつしかも
菊の盛りも、早やすぎて、
いまは初霜、初しぐれ、
朝なあさなの芋粥を
おし頂いて掌のぬくみ。
われ病患を得てし時、
若し肺炎にならずやと
心いためる山の友、
手ごろの石塊を集めきて
燃へる圍爐裡にうづめ火の
熱と化したる温石を
わが背、わが腹、わが脚と、
まわりをつゝむ石布團。
むかし、春日の神鹿を
あやめし者は生きながら
穴にうづめて石子責め、
われは慈けのあたゝかき
石をかり寢のゆめ枕。
慈けの石の大きさは
みづこの頭さながらに、
撫づる手さきに肌親く
心は通ふあたゝかみ、
非情の物に愛着を
覺ゆることの、不思議さよ。
山のしゞまの夜は更けて、
いつしか石も冷へびへと、
次第に消ゆる魂の緒や、
死骨を抱く身ぞ寒し。
若人ひとり谷を降り、
石切坂の夕やみを
藥を得んと心せく。
—葛根湯や、蘇命散、
エキホス、オリヂン、ハリバなぞ—
和漢洋藥とりそろふ、
甘ぞう、しやうが、混合せ
煎じつめたる藥湯の
香りは室にふくいくと、
春にも似たる冬籠。
ノモンハンに戰ひし、
若き歸還の一勇士、
今宵、死闘の戰歴を、
打ち臥しながら耳にする
—身に數ケ所の傷うけて、
四日、五日は食もなく、
晝は草間に隱れゐて、
夜のみ味方の陣營に
軍刀杖にたどりゆく、
草葉の露を命とも
咽喉をうるほす物語り—
われ高熱に口唇かはき、
清き山水あくほどに、
むさぼり仰ぐありがたさ、
あゝ、勿體なや、前線の
將士の勞苦偲びては
涙に枕うるほしぬ。
エキホスの匂ひ清々し、
白き布地にぬりのばし、
ひやりと熱き胸に當つ。
—聞く、熱帶の夜の宿、
苦熱地獄にあえぐ時、
生ける銀蛇をそのまゝに
肌に卷きつく感觸は
えもいはれざる心地とや—
それに似たらん身ぞおかし、
夢はさまよふアラビヤの
沙漠の果てか、地のはてか。
われこの度の病源は
ヴイターミンの不足とや、
榮養の餌くさぐさと
心をこめて與へらる、
されど口熱高くして、
いかなる美味も砂のごと、
ひとり變らぬ梅干の
酸味は舌に百藥の
長にも勝る味覺あり。
げに「鹽梅は食の王」、
古賢の言葉いつわらず。
オリヂン、水に一二滴、
あめ色の暈ひろごりて、
壺中の天地、雲とわく。
南の國のにほひある
レモンの輪切り二三片
砂糖は溶けて大白の
グラスの中に花と咲く。
山に籠りて一つき餘、
初てくだる谷の路、
けふ山峽の雲はれて、
照る小春日に映えまさる
いろは錦か蔦紅葉、
恩寵、常にいやまさり、
人の情けの身にしみて、
感謝と歡喜、胸にみつ、
あゝ、いつの日も、何事も、
あなたまかせの秋の暮。

—生駒山道場にて—

カンフルの流れが生きてゐるばかり　（虹峰）

瞰乃＝カンフルを注射したとか何んとか云ふ句は澤山ありますが、斯ういふ表現の句は如何にも病人に意識があるのか、無いのか、判らんといふ氣持がよく出てゐると思ふ。

丹路＝先生の句に「汝の父はロツク氏液をささげ立つ」と云ふのがあるが、その句に觀られるやうな肉親の温かさから出る切迫した氣分が此の提出句にはもう一つ出てゐないで、あまり病人に對する見方が冷靜で客觀しすぎてゐる點に於て、成程、表現の變つた點はあるが、内容に於て飽き足らないものがあると思ひます

瞰乃＝まるつきり冷淡な見方でもないやうに思ふ。「流れが生きてゐるばかり」と云ふところに何か未だ親身な感情がある。

丹路＝とすれば、それは闘病に闘病を重ねて、遂に諦めざるを得なくなつた、絶望的になつて了つた時の親身な句でせう……。

路郎＝肉親と解するから、そうした意見が出る譯であるが、第三者の、そうしたことに馴れ切つた人たちの觀察として見ることも出來るが、それでは句としての味がない。もし肉親者であれば、いかにも冷靜に過ぎる觀察のやうであるが多少の感情の動きは感じられる。悟りきつた人の句だとも云へやう　（編輯部筆記）

柳界展望

川柳ジーベの協

阪神電鐵産報川柳會の人々

柳聯盟本部（新京）では一月早々新年句會を開催▼臺陽川柳會（滿洲）は十二月二十日夜忘年句會を開催▼臺灣川柳社では一月三日新春句會を開催▼あきら吟社（松山）では觀翠温泉樓上に於て二周年記念大會を開催▼川雜下關支部では一月四日夜鯉谷鯛好坊氏居に於て新春句會を開催▼川雜松江支部では一月八日玉城萱路氏居に於て新春句會を開催▼臺中川柳社では一月十八日臺中市民館に於て一周年記念川柳會を開催▼川雜堺支部では一月廿五日新年句會を米本邸で開催▼選友銀輪川柳會（松江）は一月十五日新春句會を開催

消息

▼路郎主幹は一月九日、日本出版文化協會大阪支部主催の懇談會に出席▼前田五健氏（松山）は舊冬、伊豫電鐵會社の主催に據る銃後奉公〇〇贈呈のため陶郷低部町に赴かれ陶畫一千の筆を執られた▼森東魚氏（北京）は舊冬歸阪されてゐたがマニラ陥落の快報を耳に大阪を立たれた▼寺井鋭々（不朽洞會員）西川青美（不朽洞會員）橋本波夢造（不朽洞會員）田中雨月（不朽洞會員）藤岡至藝瑠（不朽洞會員）の諸氏は十一月十七、十八兩日に亘り有恒倶樂部大ホールに於て開催された倶樂部十五週年記念の會員美術餘技作品展覽會に川柳短冊、其他多數の優秀作を出品された▼鯉谷鯛好坊氏（川雜小郡支部）は下關驛に榮轉と共に川雜下關支部に轉じられた▼吉田水車氏

催

▼川柳雜誌社新春句會は八日午後五時半御津八幡宮で開催▼松坂倶樂部麻生路郎川柳講座は十一、十八兩日午後一時▼有恒川柳講座は十五、二十二兩日午後五時▼阪大川柳會は二十七日午後四時▼川雜尼崎支部は三日夜尼崎昭和荘に於て開催▼東亞川

一路集

募集句

雪空　某人選

雪空へ母の鞦目立つて來　正柳
雪空へ汗びつしよりの奉公隊　鶴聲
雪空の天氣豫報をきく夜業　彌生
雪空に在りし野戰の夜が浮び　海朗
雪空へ挑む拓士の肩の幅　榮城
信越の空は雪でも降るらしく　臥牛
雪空の朝陛下のお召しうけ　採園子
雪空へ外套とりに引返へし　可學
小走りになる雪空のかへり路　三丸
雪空に子供の凧の威勢よし　牛歩
降りかけて降らず雪空續くなり　詩朗
雪空にわざ〳〵芦屋から使ひ　斗風
雪空がいつそ嬉しい紙の旗　波人
雪空へ背の子の嘘聞き捨てず　敏郎
雪空のマラソン白い息を吐き　一角
雪空をぼんやり眺め病んでゐる　杜的
雪空へプランが出來たスキーヤー　不二
雪空がいつそ冷たい雀にし　笛六
雪空の此處に人ありつなぎ舟　香桐
雪空を仰ぎ焚火の輪にまぢる　駒志希
雪空に慣れて拓士の子が生れ　清富
雪空の寒さを下駄の音にたて　孤峰
雪空へカンテラ搖れる船着場　吐空
雪空へ航空燈がぐるり〳〵　榮坊
雪空にポツカリ一つアドバルン　三司
雪空に一スフ入りの服足早し　三郎
雪空に心齋橋で待つ若さ　治男
雪空へ軍艦マーチのよく響き　絲葉
雪らしい寒さとなつて雲動き　眞理子
雪になるらしい長靴履いて出る　一聲
雪模樣明日の豫定を變へるなり　壽堂
半農半漁雪空へ戸を閉し切り　鷄城
雪空へボタンが一つちぎれかけ　千斗
終發のバスへ間がある雪もよひ　同
雪空へ銃後の妻の息白く　美奈子
轉業の今日雪空へ誓ふ事　同
雪空に棟上げの神酒振舞はれ　紀川
雪空に動の家の道問はれ　同
雪空のまゝ暮れる燈臺　葉光
雪空で凧と模型機もめてゐる　同
（佳）雪空に友を歸した夜を悔ひ　治男
（同）雪空へ苦力あくまで無表情　榮城
（同）雪空に乳屋の足の早い事　富士
（同）雪空へ麥が整列して青し　葉光
（軸）河幅の廣さ雪空暮れかゝる　某人

軍事便　柳兒選

軍事便佛印の情緒しらせてゐ　眞理子
母として軍事便また讀み直し　小城子
軍事便生き殘りました愚痴も來る　一聲
はづかしさ寫眞も入れて軍事便　紀川
軍事便封を切る前に子等を呼び　海朗
軍事便季節はづれた御挨拶　治男
軍事便來る兄さんを美まれ　笛六
詳しくは書けぬと元氣な軍事便　抱逸
支那地圖の上で讀まれた軍事便　龜水
寒いのも暑いのも來る軍事便　臥牛
軍事便何を書いたか消されてる　牛歩
軍事便オーバ着たまゝ立つたまゝ　一角
級長になれと氣早い軍事便　鷄城
軍事便惡筆なのが親しまれ　杜的
激戰のあとらし訂正文字目立ち　笑風
軍事便先づ筆癖をなつかしみ　夕路
故郷のニュース聞きたい軍事便　香桐
軍事便開くと支那が匂ひさう　駒志希
憎らしい程簡單な子の軍事便　綠葉

（不朽洞會員）は新年を賀して「いびつでもお鏡あつて春はよし」の句を寄せられた▼富士野鞍馬氏（京都）は「捷春を賀して」日本の弘安四年知つてるか」及「皇軍の強さの中に馬もゐる」の句を寄せられた▼橋本克海氏（宮崎縣）は年頭「香港もマニラも陥ちたお芽出度う」の祝句を寄せられた▼三鴨美笑氏（羅津）は去二十日より二日間に亘り、滿鐵厚生會館に於て滿鐵川柳會主催、川柳人協會後援に依る盛大な川柳個人展を開催された▼福井哲氏（大阪）は本誌の川柳寫眞或は藝術寫眞界に於て常に卓越した技術を發揮されてゐたが一月十三日より五日間に亘り催された大毎の日本寫眞美術展に推薦の榮冠を克ち得られた▼朝鮮川柳協會仁川支部では來る二月十一日、俳界、畫界等の協力を求め國防獻金文藝展を開催されるとか、亦同協會では近く鮮内移動川柳展を催すとのことである▼岸本悟志氏（島取縣倉吉）は歳末に

聯合艦隊餘裕綽々
荒鷲に委せて城の樣に浮き

の如き時事川柳三十二句を印刷に附し配布された▼永田里十九氏（不朽洞會員）は兼ねて入院中であつたが十九日全快、退院された▼浪玲之介氏（不朽洞會員）は一月三日九州方面へ赴かれ十一日歸阪、直ちに上京と隨分多忙な日を送つてゐられるが寸暇を裂いては川柳報國に邁進されてゐる

慶弔

▼花岡鬼外氏（川雜今治支部）は舊冬男子を儲けられ健二氏と命名された▼毛利稔幸氏（川雜豐中支部）一月五日、村上四希氏（松江）一月八日、の兩氏は芽出度華燭の典を擧げられた▼成川米三氏（大阪）の母堂が十二月二十二日七十二歳の高齢を以て永眠された、謹悼の意を表します▼西尾琵氏（不朽洞會員）の嚴父が一月五日逝去された、謹みて悼みます▼永田里十九氏（不朽洞會員）の母堂は一月二十三日逝去された、行年八十一歳。謹悼の意を表します

轉居

▼武部香林坊氏は大阪市東淀川區三津屋北通三丁目六番地へ▼梶本文雄氏は大阪市東區内平野町一丁目二十八番地へ▼湯淺小城子氏は神戸市須磨區戸政町一丁目一〇ノ二へ

改號

▼久保子紋氏（大阪）は甲斐郎

社の回覽板

▼川雜草鞋會は川雜三池染料支部と改稱された▼田中新氏が入社、編輯部に勤務されることゝなつた▼多田一波氏、岩本雀踊子氏、森宗男氏、遣廣世紀彦氏、岩崎勇記氏は何れも一月限り家業の都合で不朽洞を退會された、一日も早く再起されん事を祈る

軍事便讀む間家庭の父であり　同
蔭膳の前で封切る軍事便　三昧
一年へ讀ませる假名の軍事便　同
支那語ちと覺えたとあり軍事便　可學
軍事便押頂いて皆んな寄り　同
末の子に讀ませて皆きく軍事便　志都緒
軍事便母さん逆に慰問され　同
公報の後で絶筆今屆き　清富
眞中の髯が僕です軍事便　同
軍事便こんなやさしい事も書き　詩朗
軍事便元氣でゐるとそれつきり　同
代筆で來る軍事便氣にかゝり　榮坊
（佳）星一つ增えて元氣な軍事便　同
（同）二つ名を書いて産月へ軍事便　彌生
（同）子に諭すところは假名で軍事便　十四之
（同）兵そつと母の手紙を臭いでみる　千斗
（同）軍事便まだ字の讀ぬ子へ屆き　波人
（人）幸福に姉は軍事便からの緣　早鐘
（地）許されぬ仲を缺かさぬ軍事便　千斗
（天）軍事便しばし絶えたり大戰果　葉光

川柳書架 (80)

川柳句集　大空　石曾根民郎著

▼本書の卷頭には著者の影像を掲載▼麻生路郎氏の「序」は著者の風貌を餘すところなく語つてゐる。▼本書は昭和五年から昭和十五年に至る作品を掲載。▼昭和十六年十二月二十日發行、B列6號判、六九頁、定價壹圓、二百部限定、堺市出島海岸通二丁一八二番地不朽洞發行。▼著者は路郎門の一異彩。

飛燕往來

★澤田四郎作博士より（滿洲）しばらく御無沙汰しました昨今は零下三十三度にも下り歩けばマッゲ、鼻の孔、はては瞳まで凍えついてくる寒さです。此頃はちよい〳〵大坂氏と會つて、立話いたします。貴家の事を中心とした話がおもです。當院の娯樂室には「川柳雜誌」を併せたものが備へつけてあつて、よくよんでゐる白衣の人達の姿をみうけます。もうこのハガキがつく頃は内地のお正月の頃でしよう（十二月二十六日）

★岩崎水虹氏より（姫路陸軍病院）先日は「川柳雜誌」を白衣の勇士の方々に御惠投下され、只今有難く拜見致させて居ります。書物不足の折柄一同大喜びにて讀んで居ります。一同を代表致し、御厚意の程を厚く御禮申上げます。（一月二十一日）

★浪玲之介氏より（大阪）日本人が祖國日本に驚嘆し、瞠目する日が續きます。一月は九州に五日東京に十日殆んど旅舍に過しました。二十一日上京、嚴寒の帝都に於て、最大のものに最小の力を打ちつけて居ります。

銀座もう柳を唄ふ人もなし
社令重し性格分裂せんとする
個性凍てついたる三等車の眠り
坐る椅子寢る椅子にする智慧が要り
足踏んで江戸辯耳に谺する

（一月二十二日）

―前ページの寫眞說明―

前列　向つて右から、市川治男、野元吐空、渡邊晴水、路郎先生、畔柳康光、水谷鮎美、谷口綠葉、中列　山本冬作、吉原雲峰、中川一風、長谷川三司、名田榮坊、松枝靜波、小寺鳴玉、後列　岩本キヨコ、安黒マサコ、横田方眠、小濱朴人、恩賀紀川、堤歳明、下池一也、小澤新人の諸氏

新會員を募る

松坂倶樂部　川柳講座

▼新體制下の常識として川柳を知りたい人▼趣味として川柳を創作したい人▼從來作つてはゐるが、よい指導者がないので一向進歩しないと思はれる人々は▼松坂屋（日本橋筋二）の七階にある松坂倶樂部の麻生路郎川柳講座へ入會されたい。講座は月二回、第一、第三日曜日午後一時から開講（作句・添削批評講義等）會費一ヶ月一圓。入會希望者は七階の倶樂部受付へ申込まれたい。（川柳講座幹事）

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規▼用は原稿用紙▼文字を正確に▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先は本社宛

戰捷祝賀 本社新春句會

一月八日　於　御津八幡宮

出席者（順不同）

路郎・紫香・水客・綠葉・治男・鷹丸・美知夫・豆秋・不二・鮎美・孤蓬・子紋・巨人・三司・吐空・かほる・千斗・小松園・波夢造・晴美・潮花・綠翠・寄與史・帆船・文雄・紅多呂・鑄彦・彌生・九一・八歩・生々庵・翠光・香林坊・沐天・松四郎・一笑・彩泡・綠雨・美奈子・恒明・風葉・白面人・萬的・葭乃・アート

「南洋」　路郎選

南洋も　ほんとに近い　氣がしだし　彩泡
南洋の　便り隨筆風で來る　同
南洋を　石原さんに　敎へられ　同
（貿易額減退）
だまされてそれから土人背を向け　香林坊
ボルネオの虎もいつしよに逃廻り　豆秋
南洋の　暑さが母に　のみこめず　小松園
ワンピースだけで南洋ことが足り　不二
南洋へ　ゆけと寒がり　しかられる　一笑
南洋の　これが美人で　ござりやす　同
南洋へ　寶れる自轉車　海を越え　晴美
南洋は　日本に近い　とこにされ　綠雨
南洋に　居たと云ふ人　圍まれる　彌生
南洋へ　行くか今宵の　ラッパの音　鷹丸
書屋する　樣に　南洋　樹が　しげり　美知夫
南洋の　月が明るい　輸送　船　子紋
南洋が　近ついで來た　汗をぶき　恒明
赤道と　云ふ日の海が　見直され　水客
日本と　似た　南洋の　言葉聞く　同
南洋へ　行ける顏だと　云はれて來　波夢造
征戰へ　南洋の資源　向きを替へ　哲
日本人の墓が待つてる　南洋だ　九一
南洋の　物質長生　せよと　云ふ　不二
敵彈は　椰子の實ばかり　打落し　鷹丸
南洋の　嘯を聞いてる　聞き上手　紅多呂

「罐詰」　かほる選

罐詰の　レッテル　おいしさうな色　豆秋
罐詰の　トマト、マダムの　話好き　水客
罐詰の　入方がある　慰問品　紫香
罐詰を　抱へた手で　千人針をぬひ　綠翠
罐詰を　開いて朗かな　ハイキング　同
仲人の　眼にも　罐詰　樂しまれ　鮎美
罐詰の　味も書いてる　軍事便　彩泡
罐詰に　思を着せとく　乾物屋　沐天
じやんけんに敗け罐詰あけさゝれ　九一
よい景色　ほめて罐詰　切られたり　美知夫
罐詰を　一つ買ふのへ　バスに乘り　沐天
罐詰へ　もう我儘の　顏をする　波夢造
結局は　罐詰　にして　友見舞ふ　晴美
罐詰の　中取り替へる　ハイキング　八歩
罐詰を　振れば日本の　音がする　恒明
罐詰で　日本の春を　なつかしみ　八歩
罐詰の　型にポケット　ふくらまり　恒明
罐詰で　いけると思ふ　酒を呑む　綠葉

「逆立」　波夢造選

電球に　觸れて　逆立　叱られる　晴美
生活でする　逆立は　笑はれず　九一
逆立に　なると高言　切つて去に　三司
逆立は　記錄はいまだ　破れぬか　子紋
逆立をしても　眞自目な顏になり　香林坊
逆立を　ぼやかれてゐる　二階借　小松園
棧一ッ　折つて　逆立　叱られる　翠光
逆立を　して團服を　ほころばせ　かほる
逆立を　撮すカメラの　チト慌て　帆船
逆立の　顏へ未つ子　匂つて來る　小松園
逆立の　目にタンポ、が　美しい　美知夫
逆立の　顏は　次第に　赤くなり　巨人
逆立へ　財布の場所を　變へて置き　帆船
逆立は　出來るが　二遍　落第し　波夢造

「青年」　白面人選

青年の　母へ　羞かむ日もありて　千斗
丸刈にした　青年の　眉太し　寄與史
目的を　聞けば　青年　坐り替へ　八歩
青年の　膝伸び切つた　擧手の禮　同
青年の　機嫌　澤山　炭をつぎ　かほる
散髮をして　青年の　氣がかわり　小松園
素裸になつて二十の　肌を見せ　孤蓬
青年の　防人の　歌口　ずさみ　千斗
赤たすき　掛けて　青年　見直され　八歩
青年の　内氣は母の　みかたする　かほる
鼻赤くして　青年は　風を切り　豆秋
若い字で　八紘一宇と　書きとげる　孤蓬
青年の　日記　餘白が　續いて居　美知夫
青年の　抱負マレー語　自習する　千斗
青年の　顏日の丸の　色に似る　寄與史
丸刈で　父ちゃんも青年のつもり也　生々庵
青年の　野望は　地圖を　全部赤　松四郎
報國の　道に　青年　惱むのみ　九一
青年の　生甲斐知つた　拓士村　文雄
寒空へ　いきなり吹いた　青年團　子紋
カメラより　日本刀が　欲しくなり　彩泡
青年　純情　兩手で　握り返すなり　小松園
赤襷　青年　はつきり　生きてゐる　生々庵

「急用」　互選

急用へ　花の色　丈眠に　殘り　八歩
急用だもう　其の手には　乘らぬなり　綠葉
急用が　怒つたやうな　顏でくる　九一
急用の　近道をして　友に　逢ひ　鮎美
急用へ　社長のベルの　長いこと　綠葉
急用へ　羽織の　環が　見あたらず　美知夫
急用に　女仕度の　おそい事　三司
急用の　車窓へ　富士が　美しい　寄與史
急用は　水一杯を　のんで去に　治男
急用へ　となりの方が　さきに起き　綠翠
急用を　デパート　判らぬ　聲で告げ　帆船
戰況に　急用一寸　息をつぎ　鑄彦
急用が　男の胸へ　ピンと來る　千斗
急用は　急用　看板　みて拔ける　孤蓬
呼びに來た　急用　基席慌てない　帆船
急用に　机の上を　賴んどき　鷹丸
急な用　現る角財布　持つて出る　巨人
急用の　電話ベルの　出る時分　子紋
散髮が　間に合はなんだ　田舍驛　翠光
急用に　段々がある　忙しさ　水客

沒句供養の夕（本社）

天地人五客新年號發表濟

「入門」　綠雨選

膝附へ師匠ゆつくり茶を入れる　虻蜂
入門をして窮屈な事を知り　美奈子
貢げじ魂こつそりと讀む入門書　春巢
内弟子として今日からの水を汲み　水客
入門のはき〳〵として見込まれる　夜王
入門は修業のつらさをきかされる　正路
内弟子となる神棚に灯が入り　紫香
入門の下駄が綺麗な未生流　八歩
入門のお辭儀とたがどなたやら　銳々
入門の父の稼業を繼ぐつもり　久人
宗門に入つて社長を子に讓り　曾天
入門の其後を訊けば酒を止め　潮潮
入門の雅號一字は師に貢ひ　千斗
入門はまだ明けきらぬ霜に待ち　潮花
入門の朝氏神へまゐつて來　花笑
些かの下地かくして入門す　莱
入門に村長と行く紺かすり　三司
普段着思へど明日から入らつしやい　銳々
入門をした日からは貢げる役　治男
入門の母は燈明あげてゐる　小松園
入門の當時の意氣を忘れまい　富士
入門書またも埃の中に埋め　水明
入門の其の日に買つたまゝの弓　紅多呂
入門に戰陣訓を暗ねられ　昌信
入門の本因坊を夢に見る　綠風
入門をすれば師匠の手きびしさ　正柳
入門書の通りに駒を列べて見　牛歩
入門の既に雅號は出來ており　莱
入門の端の方から名が知られ　自有浪
當然の事だけ書いた入門書　白柳子
入門を許した母の手内職　雅美

「外交」　豆秋選

外交は今一億の聲に起ち　水車
怒るかと思へば外交笑つときき　白面人
新聞の切り抜きを出す外交員　柳笑
外交がいつしかゆすりめいてゐる　九一
雪の日に來て注文をとつて去に　紫香
外交員腹が立つほどよく喋べり　富士
訥辯の勸誘員が點をあげ　青美
外交史相撲太郎が見直され　曾天
外交員時局の話だけで歸に　昌信
心臟で來る外交にまたかゝり　紫香
外交に子供の病氣暗ねられ　一鉢
外交の將棋三番はども待ち　銳々
外交の歸り野菜を提げて來る　古詩朗
外交は猫の頭を撫でゝ辭す　駒志希
外交の根氣といふを知つた宵　莱
外交の口ゆがませた名調子　香林坊
外交は犬から先へなつけとき　正路
日本語で栗柄大使は腹を立て　白柳子
外交に尻ッ尾の振り方から教へ　生々庵
錢湯で逢へば外交無口なり　蜂郎
氣にさわる事を外交笑ひのけ　美知夫
外交の不調へ御茶が冷えてゐる　八歩
外交の一かど知つた顏をする　山雨樓
大使夫人ニッコリとして引揚げる　春巢
腹にない事を外交は言ひ　恒明
外交に無學は別の手をのばし　雅美
故郷訛り通譯官をまごつかせ　千斗
外交員同じ訛りを親しまれ　勿來
大將の大使なか〳〵怒らない　豆秋

「未練」　白柳子選

好きだつた柄を寢箱へかけてやり　小松園
漫才へ秋の未練を捨てゝゆく　流舟
あきらめた笹見直す掲示板　驢川
神樣の前へ未練を捨てゝ立ち　水客
川端へ未練に立てば塵を捨て　鮎美
面影を思ひ出させる月の暈　潮花
もう龍めるやめると幹事未だや？　一聲
未練なる涙見せまい窓へ逃げ　巨人
早起ときめた炬燵のあたゝかみ　山雨樓
弱い母未練な母で親しまれ　八歩
未練がましく會議續けたり　石鹿
手相面相それから未練なく自殺　紅多呂
未練なくふみ出されたる第一歩　加久榮
轉業をする人の顏未練なし　平行
轉職へ妻は未練が少しあり　富士
突擊は生に未練のない袋　美知夫
未練なく祖國の土を蹴つて征き　美奈子
萬歲は何の未練もない袋　水客
戰場に未練もあろう歸還兵　曾天
大局のため未練なく椅子を去る　蜂郎
もう一本駄目かと未練押して見る　生々庵
賣り切れて未だ一列が聞いて見る　曲人
對面の日の靖國に未練なく　晟修
支那軍閥豚だけ持つて退却し　白有浪
禁煙はしたがパイプはしまつとき　青美
未練なく鯨のテーキにて足れり　豆秋
純綿に未練の殘る作業服　駒志希
未練など捨てゝ共榮圈へ來い　風葉
英米よアジアの未練捨て給へ　牛歩
宣德の火鉢も未練なく召され　豆秋
出征の首途さし身が喰べたいな　香林坊
首の座へ坐る匪賊のつらがまへ　孤蓬
此の涙未練でないが遺品つき　正路
未練にあらず平和愛好　白柳子

「水兵」　鮎美選

水兵の手柄機雷を生捕つて　一鉢
水兵に妹がある軍港地　虻蜂
水兵の非番映畫の話する　孤蓬
半舷上陸洩れて買物頼まれる　曾天
たゞ陸へ上る樂しみ日を數へ　晟修
水兵の非番の時はシャツも編み　久人
炊事場を見せて水兵笑はせる　波夢造
港の灯水兵さんが何か買ひ　紫香
水兵の眼に富士山が遠ざかり　市多樓
水兵の靴で煙草の火が消され　風葉
水兵は母國へ富士へ暴手の禮　小松園
水兵の咽太平洋を狹うする　莱
水兵の上衣お膽が見えそうだ　正柳
水兵の眼に上海の灯が赤い　香林坊
水兵の無口は波に聞く如し　鮎美
水兵の瀆る手も凍る波しぶき　青美
片假名の「激」水兵の太い眉　潮潮
支那海の怒濤男の生甲斐よ　同
水兵志願七つの海を呑む覺悟　潮花
太平洋背なに水兵寫される　美知夫
水兵へ大きな月が出始める　春巢
日本語、支那語、水兵上陸　水客
陸戰隊白き砂地へ散つてゆき　吐空
水兵の眦今や裂けんと子　豆秋
艦上にずらり水兵の瞳が凍し　柳太

「供養」　鮎美選

供養塔母國の方へ向けて建ち　柳太
お供養へいゝ人だつた掌を合はせ　恒明
お上手も言へず供養をもつて來る　白柳子
鐘供養白衣の勇士拍手する　巨人
供養の瞼に寫る溫顏　紅多呂
供養の夜一人ぼつちで月に向き　八櫻
知らぬ子へ供養の柿をわけてやり　綠葉
親として十三回忌の供養に居　香林坊
供養塔霜が眞白い朝でした　湊萬
供養もよしお茶つけの出る淋しい夜　水客
母の手に供養の土が溫かし　八歩
針供養女心へ雨となり　驢川
供養塔の上櫻普の低くして　水客
夫婦して供養の旅に出る日なり　久人

「舞臺」　水客選

大詰の舞臺の聲が聞きとれず　驢川
開幕のベルにかまはずまくし立て　美知夫
初舞臺の汗を取卷く舞臺裏

そのあとはどうにかなつた初舞臺　九一
雪となる　舞臺へ子役　連れて出る　紫香
脚光にまぶしいとこが　幹部居　生々庵
秋ふかき　舞臺を一人　幕にする　鮎美
通かつて　妓　舞臺に　尻を　向け　驢川
舞臺から　見て平凡な　客であり　駒志希
暗轉の　舞臺へ　子供　駆け上り　白面人
舞臺から　隅の同志を　見逃さず　萬よし
舞臺とは　別に見合の　プログラム　春巣
初舞臺　さすが血縁　うかゞはれ　生々庵
舞臺今　貯蓄をせよと　幕が下り　豆秋
栃の頭　代用食を　たべに出る　某人
舞臺人　として一億の　名に恥ぢず　水客

「發奮」　鋭々選

發奮へ下ろす子の鍬　親の鍬　滿潮
發奮がくづれかけてる　バーの隅　不二
立志傳きいた當座は　早く起き　驢川
發奮の母國へ富士へ　さやうなら　小松園
發奮へ襟のよこれがきついなり　八歩
發奮の、その後無口な人になり　柳太
發奮の當時　その儒柳の木　曲人
いとはんも旋盤工になると言ひ　豆秋
發奮の部屋尊德の像を置き　美知夫
發奮は茶漬で朝を出かけたり　夜王
發奮の眼に日の光る道廣し　鋭々

雑川　**廣島支部句會**（廣島）

十二月六日　於　殿舟寺　五周年記念大會　久米雄報

新米の仲居番頭の名を知らず　太公望
お寺から老母時局を聞いて來る　土筆坊
繁華街寺は昔のまゝで立ち　同
夕燒を靜かに送る寺の鐘　進坊
牛農の住職寺をよく保ち　可學
お寺から慇懃に來る寄附のこと　月浦
交渉がたゞ事でない應接間　同

田舍道お寺の棟を見て敎へ　江波
御返事がないで豫定のやうにする　同
ドクトルの返事の鈍さ氣にかゝり　魔美
職域を守る机に花が咲き　紫浪
番頭の律義忘れぬ精進日　美禰坊
住職は良寛に似た寺の寂　俗善蘭
生返事今妙案の浮ぶとこ　士農夫
物價高ひつそりと寺よく續き　露斗
交渉へ米食時間過きてゐる　柳石
番頭に、メートル尺がぴんと來す　同
當主の若さ寺にもある惱み　久米雄
柿の味故郷の山が迫り來る　同
郷關を出て行けば寺鐘をつき

雑川　**梅田支部句會**（大阪）

鮎美報

子の日記　復雑　性が見えて來た　紀川
犬に藝させる子供も何か食ひ　三司
可愛さのちよつと泣かせて見た程　榮坊
親方の子供も居つて叱られず　吐空
披露宴いきなり子供　産む話　治男
今日もまた吾が子の言葉一つ增え　臨光
子の希望電車屋さんになつたれど　綠葉
仕上する火花職長の腕へ散り　鮎美
鐵槌の下火花散るたのもしさ　治男
石垣の日向蜥蜴の夢の色　鮎美
石垣に添うて廻れば海青し　紀川
石垣の眞上の芒へ月が出た　吐空
石垣を一廻りする家に住み　三司
石垣は知つてるだろう殿の戀　榮坊
飛ぶ雲を石垣で見る病上り　綠葉
石垣にもたれて冬の日をおもふ　同
まちぼけの石垣に見るひやゝかさ　三郎
行列の殿樣ひとり夢心地　鮎美
酒のない父へ燒酎さびしいね　治男
燒酎があつて近頃はやる店　吐空

燒酎も土産になつた酒不足　同
燒酎ヘルンベンの眼の灼きついて　榮坊
のれんから毛ずねの見へる燒酎屋　紀川
立飲みをする燒酎の錢をよみ　鮎美
燒酎屋酒で酔へない顏がより　三司

雑川　**下關支部句會**（下關）

十二月十二日　於　市多樓居　牛休報

これからが忙しくなる窓を開け　牛休
手の引けぬ用事へ電話鳴りつゞけ　米三
敎習所たゞ眞心でやれと言ふ　可童
眞心が姉の意見へ少なすぎ　牛休
陰膳に眞心こもる湯氣が立ち　秋吉
來年の覺悟嬉しく聞いてやり　市多樓
來年の甲種かりきむ晩日そば　牛休
掛取りが驢と知つてか待つと言ひ　海朗
ナアーンダ掛取かと奥へ消え　同
掛取と知つて話題を逆にそれ　苦笑
掛取へ臍繰りそつと出しておき　秋吉
決算の女房夫の無駄を責め　穗波
決算の一ッぷく付けた除夜の鐘　市多樓
女房の赤字は皆んな子がかぶり　海朗
ボーナスを當て決算へ自若たり　鯛好坊
決算期妻も内所の當てがあり　同
決算期又殺務署へ睨まれる　米三
日めくりのすゝけが目立つ十二月　秋吉
日本に歷史がふへた十二月　市多樓
十二月乞食が雪に寢て居らず　同
親と子の思案は違ふ十二月　可童
ウインドに眞綿の雪が降る師走　鯛好坊

雑川　**三池染料支部句會**（大牟田）

十二月二十日　蝶人報

生還を期せず母艦を滑り出し　天風
お召艦その背景に陽が昇り　波人
軍艦の繪が好きだつた子も召され　同

鐵の委雄々しく海護る　世志一
軍艦が三池港に人を寄せ　平人
忍ぶだけ忍んで日本强くたち　藤樓
決心があつて忍耐よくつゞき　梅春
忍耐を給仕は眞正面に貼り　波人
忍耐の蔭に鍛へたこの戰果　路村
皇軍の勝利英米あわて出し　天秀
勝利したチーム强そうな人ばかり　鷗水
占領の聲へ勝利の手が上り　蝶人
眞珠灣勝利の蔭にあつた秘話　世志一
戰勝のニュースを母へ續返し　抱邊
勝つてゐる日本の空は晴れてゐる　初舟
勝つてゐるラヂオへ耳と眼が揃ひ　蝶人
空襲も受けずに勝利有難し　藤樓
忍耐と今更言はず國思ふ　一葉
長期戰こゝが日本の耐へるとき　抱邊
占領のたびに祖國を遥かかり　波人
軍艦が或日鯨をふと見つけ　平人
使節艦威嚇の鉾も秘めており　抱邊
軍艦と言へば日本かと聞かれ　市多樓

雑川　**尼崎支部句會**（尼崎）

十二月十九日　於　昭和莊　美知夫報

初詣下駄の疊緒がきついなり　美知夫
初詣氏神樣で濟ましとき　毬夫
初詣鳥居間近き鈴の音　綠翠
親子揃うて鳥居くゞつた初詣　加久榮
母の手をひいてうれしい初詣　鮎美
好きな娘の手の荒ゝ居る賴もしさ　美知夫
好きな娘の腿が二重に見えはじめ　鮎美
轉業と快めた覺悟の靴をはく　毬夫
戰友のかみそり痛いのは覺悟　美知夫
社長室覺悟をきめたノックする　同
叱られる覺悟でしたをほめられて　寄奥史
東亞戰起る
十二月八日日記に餘白なし　同

自轉車の掃除が出來ぬ十二月　美知夫
釣竿の人を羨む十二月　同
幸福な家お歸りの湯がたぎり　美知夫
父と子の幸福朝の白い飯　鮎美

雜川　**小郡支部句會**（山口縣）
十二月二十日　於　鐵道倶樂部　井蛙報

餅ずきが五ッ目にその味を知り　一正
三ッの子雜煮一杯もて餘し　一生
里からの餅なつかしき莚あと　凡骨
贈られた餅に一家の春は無事　游記
ストーブへ手袋の人割つて入る　多吾作
敵性へ一刀流は鞘ばしり　喜樂
蟑螂もかなはぬながら鏹をあげ　凡平
敵性へ一億一心體あたり　游記
朝の霜踏んで祈つた子の征途　凡平
死んで來いと言ひつゝ父は守札　東亞
萬歳へ窓を乘り出す赤襷　井蛙
旗の間に母を見たきり出征し　恒生
姑となつて嫁の日忘れてゐ　井蛙
小姑と言はれる年がちと寂し　游記
姑でなく大切な母であり　同
孫からの便りは姑二度讀ませ　東亞

雜川　**四ッ橋支部句會**（大阪）
十二月七日　翠芳報

渡船曳船を待つつらい朝　秀甫
治安なり曳船續く揚子江　香山
曳船へ手合圖をした橋の上　綠雨
曳船の中の子供の握りめし　八九滿
曳船は岡の我子へ手をあげて　美奈子
曳船は竿の先から金を受け　綠雨
轉業で壁に名だけを殘し置き　いづみ
轉業に南洋までと意氣高し　香山
轉業も勝手に出來ぬ聖戰下　美奈子
轉業にながい住家を離れて來　綠雨
轉業に暖簾を下す三代目　翠芳
沖仲仕辨當一つが資本なり　いづみ
差入れの辨當に罪の胸迫り　夢想
辨當が少ないと云ふ喰ひ盛り　翠芳
辨當にひやかされてる新世帶　八九滿
辨當へ我儘を云ふ一人つ子　美奈子

雜川　**天王寺支部句會**（大阪）
十二月一日　八九滿報

門松をたてぬ話の十二月　美奈子
十二月夜警の網にひつかかり　富士
十二月シャツの汚れも氣にかけず　巨人
十二月信號無視をして通り　同
御馳走に屠りなをした子供なり　八九滿
御馳走の包みいせえびひげを出し　富士
折鞄ボロぐちもなし喫茶店　綠雨
子寶に送られてゐる折鞄　美奈子
內職の歸り師走の星が降り　南風
太平洋世界注視の的になり　巨人

雜川　**堺支部句會**（堺）
十二月十六日　於　波夢造居　角堂報

強がりを二度と云はせぬ海軍旗　貴志子
無氣味な程靜かに浮かぶ降伏艦　波夢造
海戰へ我荒鷲のあばれよう　詩朗
弘安の昔たびいた風が吹く　豆秋
沈み行く敵艦に暴手の禮をする　波夢造
體あたり高射砲では間に合はず　豆秋
轟沈に魚の宿がたんと出來　綠雨
年の瀨に餅屋の爺靴はいて　龜二
年の瀨にフウト昔を思ひ出し　英二
年の瀨に時計は止つたまゝにされ　波夢造
年の瀨に寒い顏してあらはれる　アート
厄年もどをやら無事に暮れになり　詩朗
年の瀨や配給品に死にもせず　貴志子
年の瀨を首が飛ばないだけで越し　路郎
十二月だつせと肩をたゝかれる　豆秋
大層に姑風邪をひいて居る　貴志子
風邪ひいて寢てると云はす電話口　豆秋
風邪引き兒へ胴あげの連れが來る　詩朗
非常時だ風邪をひかぬも國のため　英二
こたつから鼻詰らせて理窟言ひ　龜二
風邪聲で出すは淋しい預金帖　路郎
借りある人とも見えず溫泉にひたり　同
借る時も斷る時も女が出　昌ぼん
金借りてから人物見込まれる　豆秋
借金は借金遊びに來ひと言ふ　路郎
借りある儘で腦溢血になり　同
借金も自慢で話す高であり　豆秋
借金に馴れて晦日も宵寢する　詩朗
金借りる事を忘れてよばれてる　豆秋
借金をする顏のない友許り　貴志子

岡南句會（岡山縣）
十一月十八日　於　福田種鶏場　九坡報

部屋借りて傘一本の置きどころ　笛六
監視所で見るふるさとの良い景色　笑風
監視所へ煙突遠慮なくけむり　鶏城
大陸へ立つトランクが三つ四つ　宵月
トランクが本革といふ威張りやう　曉聲

雜川　**奉天支部句會**（奉天）
十二月十五日　水車報

また一つ島の名を知る電擊戰　白隆
電擊は矢張り日本のものだつた　呑湖
電擊の鮮かあつぱれなり　八翠坊
米英を打てと華僑も寢返りし　蘇面
打倒英米にんにく臭いのも叫び　光陽
闘へば勝つ皇軍の有難さ　呑湖
任かしといてい、海軍の强さなり　同
必勝の影に涙の姉が居り　戰車
必勝を祈る生母は人の背に　東麗
組長の笑ひへ抗議言ひそびれ　痴牛朗
瓜子兒の皮をぶみつゝ席に着き　白隆
汚すだけ汚して闘へる支那料理　水車
皿數へ箸のとゞかぬ支那料理　蘇面
支那料理隣は胡弓彈き初め　水車
支那料理五族協和を皿に盛り　蘇面
支那料理白布氣の毒ほど汚れ　光陽
もう喰へぬ頃へ珍味の支那料理　蘇面
そのあとで茶貰が欲しい支那料理　八翠坊
日本の覺悟世界の血をわかせ　白隆
一億の覺悟促す大活字　蘇面
かたかなの覺悟の手紙あはれなり　水車
總會が濟んで馬機を斬るつもり　八翠坊
寢摹も賣り切れました年の暮れ　東麗
年の暮れ荷物嫌ひも一つ持ち　水車
カレンダー暮の仕事を割當てる　白隆
連勝のうちに世紀の年も暮れ　柴瞳
新聞を讀まずに包む年の暮　八翠坊
年の暮嘘を承知でだまさるゝ　痴牛朗

雜川　**出雲支部句會**（出雲）
十一月十七日　於　八雲居　凡句報

戰死した友に濟まない功七級　一郎
默禱へ戰地の倅を偲びつゝ　八雲
默禱が今濟みました咳ばらい　豐次郎
躍進を奏でる貨車の軋る音　凡狗
ルーズベルトマイクに聲が强いぢ　明人
我等住む街は市制ださあ朝だ　さわだ
功勞者仙臺平のすれる音　笑朗
アメリカを叩けと太平洋からの風　綠之助
叱られてハンドバックを隅へ投げ　とも子
朝露のまだ光つてる初詣　みゝ子

朝詣玉砂利の音ふみしめる　花代
町會の旗が來てゐる朝詣　幸子
朝詣の歸りにならぶお豆腐屋　花奈女
朝詣丸太の橋の霜をふみ　花津枝
朝詣白衣の人をふと見かけ　千代
朝詣日本人と云ふ感謝　すみ子

阪大川柳會（大阪）

利生報

引越の末練にのぞく緣の下　柳秀
緣の下もう菊の鉢邪魔にされ　たけを
緣の下隣の猫が呼びに來る　同
緣の下動八等を頂戴し　楠水
緣の下蟻戰線に異常あり　たけを
層買ひも一緒にのぞく緣の下　春巢
ひとり身の男めし屋に名を知られ　柳秀
賣切申候と書かされた標札屋　春巢
長女の死を悼む
花散りて色則是空まのあたり　楠水
三男金鵄勳章を拜受して
でかしたり少しお役に立つたのか　同
そんな國あつたかと宣戰國の地圖　方正

松坂倶樂部川柳會（大阪）

十二月二十一日　白面人報

太平洋の廣さ先生脊のびする　久行
二兎を追ひ太平洋を先つやられ　石鹿
太平洋燕はどこの島に居る　白面人
太平洋沈むのも亦派手なこと　同
皇軍に太平洋がせますぎる　生々庵
末ッ子の名前で知れる子澤山　久行
轉任も新聞に載る子澤山　雅美
子澤山肩をもむ子に抱かれる子　同
子澤山あの子もですかと云はれてる　同
兄さんに大中小を付けて呼び　同
珍客へならべて見せる子澤山　恒明
子澤山心臟の強い子も生まれ　同
も一人分戴きますと子澤山　同
吐られた子へ寄つてゆく子澤山　同
それぞれに役がついてる子澤山　同
子供達に追ふましてと寄附を逃げ　石鹿
洪恩を扶養控除に知つてゐる　同
婿養子多産系からさがして來　同
轉任の記念の樣に產んでゐる　同
子澤山英靈があり白衣あり　同
子澤山保險の事も考へる　曽天
引越しにはつきり見せた子澤山　生々庵
子澤山やけに生んでる樣に見え　同
子澤山お分けしませうとは云はず　同
子澤山醫者の判らぬ勘をきき　同
妹の抽斗開けてわめかれる　恒明
もう一度抽斗開けてあきらめる　同
御立服らしく抽斗えらい音　同
横着な足で抽斗閉めてゆき　同
階段に抽斗がある妻のさと　恒明
抽斗へ世界四つにたゝまれる　雅美
抽斗に道具屋愛想の蠟を塗り　同
抽斗に手をかけ又も思案する　石鹿
鐵臺の抽斗のぞくまいのぞくまい　同
御用納め抽斗だけにやつて來る　同
馘になつた抽斗はそのまんま　曽天
抽斗をあけたあけぬで姉怒り　生々庵
生還を期せず抽斗びんと閉め　同
總桐ですよ抽斗拔いて見せ　同
抽斗に昔のダイヤ見棄てられ　同

有恒川柳會（大阪）

十二月十一日　於有恒倶樂部　銳々報

海鷲の桂馬は樂に王を詰め　青美
扼腕をハワイに迄も伸ばしたり　同
五人目も軍艦ですと苦笑ひ　行三
貼り替へた障子に子供いひきかせ　青美
末つ兒は障子のかげへ話しかけ　至藝瑠
障子張ることも嬉しい歸還兵　波夢造
電へ障子を明けて叱られる　同
玄關の障子急く程がたついて　波夢造
割勘は最初安いと言つたのに　青美
乘つてから割勘しばしもめてゐる　同
割勘へ下戸引合はぬ酌さゝれ　至藝瑠
割勘で言ひにくい貧鬼がつき　同
甘篤へ無理な割勘持つて來る　同
新社員先づ割勘を敎へられ　同
藝者へは割勘だよと披露をし　同

十二月十八日

齒ブラシの父へお汁が冷めますヨ　波夢造
ちちははと順に齒ブラシかけて　德二
入齒完成感しのにおい齒刷子だ　至藝瑠
非常時だ齒ブラシちびるまで使ひ　行三
等外の齒ブラシ當ててしよげて居　亞蒼海
齒ブラシもちびる出荷をうらやむ　路郎
齒ブラシの固さへ宿が明けはじめ　同
二三等急行齒刷子忘れて來　同
消ゴムの痕を稅務は見つめてる　青美
消ゴムを削つた事も懷かしく　波夢造
消ゴムをストトントンと落したり　同
向學へ家計を秘す荒物屋　青美
遺書を見てきつい親爺の情知る　同
辨當を押えて詰めた親心　波夢造
雜煮餅先づ出征の子に据える　同

ぎんりん句會（松江）

十一月五日　於邊信診療所　快哉報

甲上の嬉しさ慰問に書き加へ　早苗
踏切りの向ふも遲れ相な顏　山川兒
忘れもの踏切り越して思ひ出し　快哉
隣組笑つて居れぬ國に住み　同
ハンドルが握て見たいバスガール　鶴葉
轉業の朝だ希望の大地踏む　靜朗
工事場の事務所硝子にすきがあり　遲兒
何時工事するか、豫定地草がのび　鮮吉
線路工事嫁が島なと無關心　叮紅

十二月十日

模型機の落ちたところが空閑地　快哉
模型機に氣流のことも知つて見る　松江子
模型機へやつぱり日の丸書いて云ふ　十詩
山川草木模型機持つた子が住める　叮紅
木の枝で歸らぬ一機雨にぬれ　遲兒
此れ丈けは秘密一膝寄つて聞き　一聲
明朗でゐて秘密あり女事務　松江子
手紙きて秘密がばれた二階借り　久三郎
機械まで覺悟の出來た唸りよう　四希
日の丸の下で覺悟の舉手の禮　快哉
演習の疲れを軍歌知らぬなり　同
米國よ聞け神風の例あり　遲兒

徐州川柳會（徐州）

十一月八日　於華北運輸社宅　ひろし報

持ち歩くオーバに金をかけてをり　ひろし
オールスフの外套着るも國の爲　多々良
外套の後姿も父に似て　鶴城
へそくりを子のオーバーと母は決め　加一路
英米の風で重慶息をする　華木
村の子も一役買つた治安維持　玉人
胸を張る治强リボンのボーイなり　鶴城
用のない湯をたきらせる桐火鉢　雨町

十二月十四日　於大力

毛皮して近頃十面のよいらしく　多々良
襟卷をはづさず隱居あがりこみ　玉人
襟卷の奥から咳いて意見をし　華木
慰問隊國防色が三味を引き　三草
慰問團土地の事情もきいて去に　ひろし
片假名の慰問文には母の智慧　はるを
家族の名つらねて慰問袋出來　玉人
開戰のニュースに皆は座りかへ　はるを

七號室雜記

▼前號は大好評だつた。編輯局はみんな子どものやうな欣びを感じて張切つてゐる。一段と御支援をたまはりたい。

▼前號は「新春號」だつたが、刷上つて見ると、例年の「新春號」と、どつかに違つた感じがする。表紙の「戰勝祈願」には新春らしい森嚴さも出てゐる。午の年に因んだ馬に關する原稿もある。それでゐて、新春の匂ひが稀薄だ。

フト氣がつけば「謹賀新年」の文字がどこにも見當らぬ。コレだと思はず手を打つた。讀者諸氏の年賀廣告は例によつて自粛してゐるが、それにしても社の年賀廣告は入れるべきであつたのに、十二月八日の大戰果が、賀正の文字を吹き飛ばしてしまつたのである。私達の氣持は昭和十七年一月といふよりも、昭和十六年十三月と云つた方がふさはしい氣分で編輯してゐたのに違ひない。

その底には正月どころかといふ氣持が働いてゐたのであらう。

讀者諸氏、寄稿家諸氏も同樣の心境にあつたものか、このことに觸れた人は一人もなかつた。しかし社としては謹んで諸氏の健勝を祈つたことは云ふまでもない。

▼有史以來の大戰をもつてゐながら一回の飛行機の襲撃すらうけないで正月の餅がいただけたことを私たちは幾ら感謝しても感謝しきれなかつた。日本にうまれた有難さを誰も彼もが心から口にしてゐた。勿論私もその一人であつた。

▼一月十日、奈良縣觀光課の佐藤主事の好意で某人氏と二人、大和の飛鳥へ出かけた。ことしは吟行地調べを、この方面から書くつもりで、その下調査に出かけたのである。風もあつて寒い日だつたが橿原神宮前から、徒歩で飛鳥方面へ向つた。さすがに飛鳥への路ははのぼのとした春めいた感じがしてゐた。あちこちを見せて貰つて、最後で飛鳥座神社で飛鳥鍋を滿喫して夕刻辭した。

いろ〳〵好意を寄せて下さつた佐藤氏、桐谷氏、　氏、飛鳥氏に感謝する。「吟行地調べ大和篇」はまだ〳〵精査する必要があるので三月號あたりから發表する豫定である。

▼表紙は時局柄、寒稽古の雄々しい姿に、大政翼賛會の諒解を得て、同會の標語「この一戰何がなんでもやりぬくぞ」を配した。カメラは福井哲氏、モデルは一番手近な撮影者自身がモデルとなつた力作である。

▼大西八歩氏が、昨一ヶ年間、川柳と寫眞と四ツに組んで誌面を賑やかにして呉れてゐたのを、一月の句會らか句を出席者に作つて貰ひ、選句を二月號誌上で發表し、その秀逸句に其の寫眞を額面大に引き延ばして贈呈することとした。本誌三頁に發表した七氏の川柳と模擬飛行機の寫眞がそれである。寫眞は例によつて福井哲氏の撮影である。第一回發表の秀逸句の作者名が不明につき至急編輯局までお知らせ願ひたい。

▼小山文三氏の「丹波の猿公猪公其他」は地方のカラーを出した興味ある隨筆であるが、本號で完結、次號には同氏の「丹波の狐」を發表することとなつたので期待されたい。

▼「病間二句」の作者高翁は高尾亮雄氏のペンネームである。生駒山上の吟詠で、藥の廣告しみてゐて面白い。山上に病んで、實際いろんな藥を服用したんだそうだ。

▼一月十七日に、二〇一號室から、一階の七號室に轉室した。これで、このビルで三回目の轉室である。今までは昭和通の電車路に面したところにゐたので、ゴーゴーたる電車の響で、いかにもビル街に働いてゐる感じがしてゐた。窓からは朝日のタワーがすぐそこに見えた。時計臺の周圍を飛び交ふ鳩の群れに慰められる日さへあつた。部屋から見た街の感じは有樂町そつくりだつた。東京から來た友人は全くだと云つて、この街を見下ろすことをよろこんだものだ。しかし部屋が狹いので來客と落ちついて談を字ることが出來なかつた。暑いころには廊下に机を持ち出してゐたが、寒くなると、みんな押合つて仕事をしてゐた。そのために來社された方々が氣兼ねして勢ひ早く引上げられたやうだ。これには一寸弱つて「千客萬來みな來ると困るなり」と云つてよく笑つたものだ。どつかいゝ部屋はないものかと物色してゐたが、なか〳〵適當な部屋が見當らない。たまたまあつても、非營利的な文化事業を永續させるには餘りに高いレントに、早速机を運び込む譯に行かない。とう〳〵四年あまりをこゝで過した。今度移つた七號室は一階で、犬殿橋の通りから出入が出來て、いたつて便利だ電車の轟音は相變らず聞えはするが以前の部屋ほどには感じない。

一所懸命に仕事をしてゐれば音響から全く遮斷されてゐる。それに僕の好きなタバコ屋が、すぐ筋向ひにあるのもうれしい。部屋の廣さはザット前の二倍位あるので、仕事が仕よくなつた。そしてみんなが、金のことなんか忘れて愉快に働いてくれてゐるので、有難いと思ふ。川雀が金儲けと緣のない仕事であることを說明してもうなづけなかつた人たちが近ごろでは漸く理解してくれるやうになつただけでも愉快である。

金儲けを無視し、時間を忘れて、新日本文化昂揚のために働いてゐる私たちはたしかに幸福である。そんなことが出來るものかと云つてゐた人たちは、チト見學に來て欲しいときへ思つてゐる。今夜も、このビルの私の部屋にだけ灯が點いてゐるのである。この部屋へ移つてからまだ遠來の客と云へば高知へ引越した野島神樂氏位のものであるが、二〇一號室では張家口の柳路氏夫妻をはじめ北京の東魚氏、默然人氏、朝鮮の省二氏、鹿月冠氏、東北の五花村夫妻等の珍客と、膝を押合つて歡談したことを想ふと何んとなく懷しい部屋である。川雀にとつては歷史的な部屋として忘れ得ないものがある。

▼月評「作家指針」は新らしく移つた七號室で開いた。山本邸の階上の堂々たる雰圍氣は消し飛んでしまつたが、社の卓を圍んで談笑するのも又異つた空氣が漂ふ。今後はなるべく社で集ることにする。

▼私の父は明治四十二年七月の北區の大火の直後、九月に亡くなつたが私はこの九月が來れば亡くなつた父の年齡まで生きることになる。川柳に明け川柳に暮れてゐるうちに、父の年まで生きて來たといふことが私をホツトさせる。考へて見れば父は若死だつた。いよ〳〵これからといふ年だつたとも云へる。何事かをなすといふ點からも、人生を知るといふ點からも、もう少し生きてゐるべきだと思ふ。父よりも長生するとして、何事かを遺さねばならない。その何事かが私にとつては川柳より外にないのだ（路郎生）

二月句會

★7日（土）

★二月七日（土曜日）午後五時半
★會場　御津八幡宮（電南八六四〇）
南區八幡町佐野屋橋筋角
★兼題　「衣料切符」　麻生路郎選
「敵」　清水白柳子選
★講演　「日本軍艦史」　戸田孤蓬
主催　川柳雜誌社

★★ 社關の係人々 ★★

主幹

麻生路郎

賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴濱　藤村作　藤本夘之助　顯原退藏　淺田一　末弘巖太郎

客員

鳥山一歩　沖野岩三郎　大島濤明　大谷五花村　亀井晨修　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　高尾亮雄　生方敏郎　窪田銀波樓　山本雨迷　安川久留美　前田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　森東魚

不朽洞會員

橋本綠雨　高橋かほる　福田山雨樓　西田艸樂　永田里十九　奥村丹路　岩崎柳路　寺井鋭々　大西八歩　高澤一・溟　戸田孤鐘　石井白面人　川出美根子　中島生々庵　戸倉普天　小畑自有溟　古川風竹　前山北海　古川覺花麗　岩崎山石　藤井友郎　来本貴志子　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　西川青美　黒川紫香　丸尾潮花　岩橋双虎　岡田某人　岩崎松代　酒井斗風　北川春巣　矢野赫堂　布施筑川　小林橙舍　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾桑　阿萬萬的　櫻川不水　田中風葉　中原銑人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　小川恒明　野口柳太　酒井美知夫　飯尾寄與史　小林文月　谷川綠風　國弘半休　篠山籌彦　月原宵明　高田抱逸　逸見灯竿　石原伯峯　植山九天　一笑　大森風來子　鈴木九坡　鈴木石鹿

★

姫田夕鐘　村松夢裡　市場浸食子　吉田水車　妹尾八九滿　須崎豆秋　春元紀太　宮岡白峰　石曾根民郎　中西おさむ　原史風　正本水客　濱田賢次　多田市多樓　清水白柳子　清水史路　清水友帆　石野秀雄　河野夜王　津路紅多呂　渓玲之介　谷口綠葉　德永雅美

支部と幹事

道頓堀支部(大阪)萬よし　函館支部(函館)晨修　梅田支部(大阪)鮎美　籔川支部(島根)絲之助　鳥取支部(鳥取)鐵州　松山支部(松山)耕一路　天王寺支部(大阪)八九滿　鶴町支部(大阪)双虎　御池橋支部(大阪)夢裡　松江支部(松江)山川兒　大鐵局支部(大阪)柳太　西條支部(愛媛)英賀夫　城南支部(大阪)申仙　今治支部(今治)文庫　川雜光笑會(大阪)里十九　竹原支部(廣島)芳郎　廣島支部(廣島)久米雄　豐中支部(豐中)紫香　下關支部(下關)半休　北鮮支部(羅津府)美笑　蒙疆支部(張家口)柳路　上海支部(中華)天作　鐵道病院支部(大阪)春巣　渚支部(大阪)みのる　四ツ橋支部(大阪)翠芳　布哇支部(布哇)鷺花麗　堺支部(堺)角堂　岡山支部(岡山)九坡　尼崎支部(尼崎)美知夫　日和佐支部(德島縣)賢次　川雜染料支部(大牟田)蝶人　大洲支部(愛媛縣)椋影　小郡支部(山口縣)井蛙

募集

第十九卷 第四號課題
二月廿日締切
(十句以內)
劍道　池田可宵選
同　窓　寺井鋭々選

第十九卷 第五號課題
三月廿日締切
(十句以內)
農村　戸倉普天選
漁村　濱田久米雄選

第十九卷 第六號課題
四月廿日締切
(十句以內)
釘　西田艸樂選
獨身　多田市多樓選

毎號募集(毎月五日締切)
近作柳樽(雜吟廿句)　麻生路郎選
川柳塔　麻生路郎選
同舟近詠　(會報)
各地柳壇　麻生路郎選
文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の原稿紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る
▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。
▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事。
▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
▲書體はなるべく楷書(川柳雜誌原稿)と封筒に朱記の事。
▲締切は嚴守されたし。
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

規格判B列5號
川柳雜誌 第十九卷 第二號
毎月一回一日發行

定價
一冊 ㊍ 金二〇錢(送料一錢)
半ケ年・六冊 金一圓八十錢(送料六錢)
一ケ年・十二冊 金三圓六十錢(送料十二錢)
外國送本には海外郵送料實費の加算を乞ふ
御註文はすべて前金で願ひます。振替(大阪七五〇五〇)又は小爲替を御利用願ひます。御註文は何月號よりと御指示願ひます。轉居又は改號等の節は著新併記の事。

昭和十七年一月廿五日印刷
昭和十七年二月一日發行

禁無斷轉載　本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

廣告
本誌廣告に御用の節は川柳雜誌社廣告部へ御一報下さいますやう。

日本出版文化協會
會員番號 壹四〇八五
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地(昭和ビル)
振替(大阪)七五〇五〇
電話土佐堀 三三三三番 八一六四番
編輯兼發行印刷人 麻生幸二郎
東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社

發行所 川柳雜誌社

★毎號、戰線の勇士に送られたい方は部隊名をお示しの上本社宛に御申込み下されば郵税を奉仕して直接發送致します。

送本者名 住所氏名

アサヒビール

大日本麦酒株式會社

含有滋味が
もたらす
元氣

愛飲家に
確認さる

ガラス壜代用
紙容器

金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・組立式各種・藥品・食料品・菓子等の容器として最適

大阪市住吉區晴明通二丁目四〇番地
二葉屋商店
電話事務所用 天下茶屋 五八〇二番 五八〇三番
工場用 同 五八〇四番

のために

姙娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

ワダカルシューム錠

大阪道修町 和田卯助商店

樹林醫學博士
片瀬醫學博士 推奨 監査

片瀬醫學博士述
「安産のために」冊子呈上

東京
ヤビー

ワイシャツ
婦人服地
其の他

大阪市北浜二丁目 片倉ビル
電話北浜(23)六六三六番(4)

SENRYU ZASSHI No・217
Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十六年一月廿五日印刷納本・昭和十七年二月一日發行

川柳雜誌

第二一七號　(停)定價金三〇錢　送料壹錢

感冒の予防と治療に

THERAPO TABLETS 20

テラポール錠

感冒
中耳炎
扁桃腺炎
蓄膿症

各種の化膿菌、流行性感冒菌、淋菌等生体内に潜入して病源となる悪性細菌を確實に撲滅し、化膿性皮膚疾患、扁桃腺炎、感冒、中耳炎、蓄膿症、齒槽膿漏、齒齦炎、丹毒、敗血症、膀胱炎、急性慢性の淋疾等を最も短期間に治療せしむる新發見の化學療法——本邦ズルフォンアミド劑の始祖たる榮譽と卓越せる技術による最高の純度とを以て全國醫學界に信認せらるゝ第一製藥のテラポール！

六錠・二〇錠・一〇〇錠

元造製
第一製藥株式會社
東京日本橋區江戸橋
大阪東區道修町